
ニートの姉などもう要らんッ！

中村

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ニートの姉などもう要らんッ！

【Nコード】

N5365X

【作者名】

中村

【あらすじ】

できる子だった姉がニートになってしまい。妹はこのままではいけないと両親を説得するが「あの子是可以る子だから」と聞く耳を持つてもらえず、どうにかしようと妹が頑張る。姉が初めて三次元の異性に興味を持ったので「お姉ちゃんとは人と接すればすこしは変わるかもしれない」と淡い希望を抱き、姉が気になる異性にアプローチをとると……彼は二次元（特にライトノベル）が好きの変わり者だった。そんなふたりをくつつけようとする妹の話。

異臭漂う姉の部屋（前書き）

ここで投稿するのは初めてなので、不慣れです。ついでに、作品は微妙なのしか投稿できませんが、楽しんでいただければ幸いです。ネタが古かったりマイナーだったりします。

異臭漂う姉の部屋

姉はニートだ。

働いたら負けだと抜かす最低の人種である。

「お姉ちゃんなんてもういらない！」

バンツ！

居間のちゃぶ台を叩き、アタシは両親に言い放った。

今日この台詞を言うのは何度めだろうか？

最初に「ニートの姉などもう要らんツ！」と言った辺りではお母さんは軽くひいていた。そんなにひどいこと言ったかな？

「ハツハツハ。しずくは元気がいいな」

最近メタボ気味になつてきた腹をさすりながら、お父さんは笑った。お腹の脂肪の振動ゆえか、眼鏡が半分ずり落ちた。

「心配しなくても大丈夫。あの子はできる子なんだから」

「お父さんは呑気すぎるんだよ！」

「大丈夫よしずく。あの子はやればできるこなんだから」

「お母さんまで」

たしかに、姉は『できる子』だった。

内気で社交的ではなかったけれど、勉強は人並み以上にできることを自慢にしていた。しかし、その勉強が姉を狂わせてしまったのだ。

「お姉ちゃん、小さいころからお受験勉強し続けたせいであんなふうになったんだとおもっけど？」

姉の部屋があるであろう居間の真上を指さした。この程度の声ならば、ヘッドホンをしながら【801】系のシヨタ本を読んでいる姉には聞こえないだろう。さつき確認したから間違いない。

小さいころからコミュニケーションなどとらずに、勉強ばかり続けていた姉は、人づきあいをやったことがない。というか、小学校

卒業式まで友達と遊んだことすらなかったのだ。

ぶっちゃけ異常だ。

初めての友達ができたのは、中学一年生の秋である。それも、たまたま図書館でぶつからなければ永遠にあうことはなかったであろう人物だ。

ちなみに、二十二歳になって半年はすぎようとしている姉の友達は二人だけだ。

別に友達の数はずすぎなくていいとおもっけど、いくらなんでも少なすぎやしないだろうか？

「とにかく！ 高校卒業してから家に引きこもりっぱなしのお姉ちゃんなんてもう要りません！」

ババン、とアタシは断言した。

父親は微笑み、母親はひきつった顔をしていた。

母親がこんな顔をする理由はよく、わかる。

アタシが、勉強がまったくできないからだ。あの表情は「お姉ちゃんの心配してる暇があるなら勉強しなさい」という顔だ。

まったく。勉強はできるに越したことはないけれど、勉強がこの世のすべてだとおもっているお母さんには何を言っても無駄だということとは、いままでの人生十五年のなかで十分に理解している。

「お姉ちゃんがニートでいるのはアタシには耐えられないの！」

「何を言ってるんだしづく。ちずるはただ就職先を探しているだけだろう？ いまは不景気なんだから就職難だ。有名な大学を出たひとですら、職に困る世のなかになっっているんだよ」

ええい。親父のなんと的外れなことか。

姉はその就職活動もせずに遊び呆けているというのに！ どうせいまだってひとりで『ピ——』なことや『ピ——』なことをやっているか。ゲームをしているだけだろう。

「お父さん、お姉ちゃんはそのんことしてないんだよ。大学行かないなら早く就職活動してもらわなきゃ。だってパソコンとゲームとマンガの中で入り浸ってるんだよ？ このままじゃあお姉ちゃん

がニート街道まっしぐらなんだから！」

危機意識をすこしでも持つてもらおうとしたのだけれど、父親はテレビをつけた。

「高校野球が始まるな。お母さん、お茶を」

「今日はどこの試合でしたっけ？」

ああああああ！

この両親には本当にうんざりさせられる！

高校生野球なんて見てる暇はないと言っても通じるべくもない。

しかし、アタシは言わずにはいらなかった。

「社会に出て働いてもらわなきゃお姉ちゃんニートのままだよ！」

『嫌だ！』

二階から声が聞こえてきた。

なぜか『働く』という言葉に反応したらしい。いままでの会話は聞こえてなかったのになんで『働く』って単語にだけ反応すんのよ！？

絶対おかしいわよ、アタシの姉は！

「もう二人には何も言わない！ アタシはアタシのやり方でお姉ちゃんを真人間に戻してやるんだから！」

「だから、あの子はやればできる子だ」

「本当よ。あなたもお姉ちゃんとおなじくらいの点数をとってから言いなさい。この間は目も当てられなかったんだから」

くう。

そう言われるのはわかっていたけど、見向きもされないで言われるのは精神的にこたえた。

地デジ化だか、だれが得するのかわからない変更によって買い換えられた薄型テレビの中では、試合がはじまった。応援団の掛け声が聞こえた。

親に相談したアタシがダメだったんだ。

どうせ、ニート化するという恐ろしさに気づいているのは、この家でアタシだけなのだ。

ならば、アタシだけで姉を正すしかない。

すぐさま二階へあがると、姉の部屋をノックする。返答なし、ヘッドホンをしているのだろう。

「お姉ちゃん、聞こえる？」

コンコンコン。ノックをするがやはり答えてくれない。

ドアの隙間から漂う異臭をこらえながら、姉の応答を待つ。

「お姉ちゃん？」

姉、ちずるの部屋のドアをゆっくりと開き、隙間から覗いた。

「えへへ。えへへへへ」

気持ちの悪い笑みを浮かべながら、望遠鏡を覗いている姉を発見した。

あの望遠鏡は、アタシが中学に入学したときと同時に、姉が購入して星を見せてくれた思い出深い逸品だ。

「お姉ちゃん。聞いているの？」

部屋に踏みこむと、臭う。

ベッドの上にはしわくちゃの布団、そのそばにあるゴミ箱にはぐしゃぐしゃに丸めたティッシュの山がつもっているし床にいくつも転がっていた。

ほかにも膝よりも高く積まれたカップ？のから容器と紙コップがある。

あまりにもだらしない生活態度であるけど、マンガやゲームなど綺麗に整頓されているから不思議だ。もっと掃除するべき場所はあるだろうに。

「お姉ちゃんってば」

「えへへへへ」

気持ち悪ッ。

これが姉だと認識する度に憂鬱になるアタシだった。

「おねえちゃんってば！」

ヘッドホンを無理矢理外すと、姉はようやくこちらに気がついた。持ったヘッドホンからは何かの曲が流れていた。こんな大音量で聞

いていたのに、なぜ『働く』という言葉が聞こえたのか。

「何を見てたの？」

「え？ なにをつてなに？」

姉は目をそらした。あからさまである。

引きこもりを始めた姉の服装はおしゃれっ気のない眼鏡に汗を吸って湿っている無地のショーツとキャミソールだけだ。長い髪はぼつさばさである。

お風呂には不定期に入るし、着替えはしないし頭はまったく洗わないので姉は臭う。そして、部屋は喚起などまったくしないから、嫌な臭いが部屋に充満しているのだ。

「で、何を見ていたの？」

嫌な予感がする。

いまは昼だ。

星は見えなくもないだろうけど、望遠鏡は上ではなく水平に向けられていることが不審だった。

「ちよつと鳥を観察していて――」

望遠鏡を死守しようとしている姉を押しつけて、片目をつむり、望遠鏡を覗きこんだ。

そして絶句した。

「あああ！？ 見ちゃダメ見ちゃダメ！ しずくダメダメ！」

望遠鏡から顔を離し、姉を見る。哀れなまでに狼狽していた。それもそのはずだ。

姉は、ひとの家の覗きをやっていたのだ。アタシが覗きこんだときに見えたのは、私と同年くらいの男の子がジャージから私服に着替え終わっていたのか。ジャージをハンガーにかけていた。

「お姉ちゃん。どういうことなの？」

なんということだろう。

姉は、二トどころか犯罪者予備軍に入っていたのではないか！

「その、目の正月というか。眼福というか」

頭が痛い。

血流がおかしくなった頭を押さえながら、アタシは考える。

これは、ある意味でチャンスだと。

「お姉ちゃん。あのひとのこと、好きなの？」

「え！？ 好きというか、ずっと眺めて自分を慰めていたというか」
それ、ソフトに言ってるつもりかもしれないけどオカズにしてた
って意味だから。

「お姉ちゃん。あのひとに声をかけたいの？」

「え？」

「どうなの！ 答えなさいよ！」

「う、うん」

強引に聞くと目をそらしながらもうなずいた。

姉が二次元以外の異性に興味を持つのは、おそらくこれが初めて
だろう。

「なら、覗きなんてやめて素直に告白すればいいでしょ！」

「そそんなことでできないよ」

「どもりすぎ」

ふうつと息を吐きだし、これからどうするべきか考えた。

このままでは姉は変質者として逮捕されても仕方がない。しかし、
いまならまだ間に合う。正面からあの見知らぬ少年に向き合えば、
姉は変わるかも知れない。

ふられて、もっと引きこもりに【伯】がつくかもしれないけど、
何もしないよりずっとマシだ。

「警察に通報するから」

「ちょ、やめて！ 姉を売るの！？ ユダ級の裏切りだよ！」

「なら、覗いてたひとと付き合えるように努力する？」

「ヤダ！」

瞬間的に言われた。

ちよつとむかつとした。

「お姉ちゃんがそういうつもりなら、アタシはお姉ちゃんのパソコンを壊すだけだよ！」

ノートパソコンを持ち上げて、机の上に置いてあるデスクトップに振り上げた。

「やめて！ やめてください！」

涙ぐんで止める姉の姿は見えていて情けない。

友人に「パソコンは便利だけど依存性が高いから注意だよ」と言われたことを思い出した。きっと姉はパソコン依存症なのだろう。まるで麻薬をとりあげられてしまった患者さんみたいに狼狽している。

アタシは邪悪な笑みを浮かべながら、問う。

「ねえ、お姉ちゃん。アタシの言ったとおりにする？」

「する！ するよ！ だから止めてよ」

マジ泣き寸前だったので止めた。

ふうつと息を吐いてから、アタシは続けた。

「お姉ちゃん。明日から自分を変えてね。働いたら負けなんて言わないでね」

「それはちよつと」

ノートパソコンを持ち上げると、すぐに姉はうなずいた。友人に感謝しよう。

パソコンを人質にすれば、それに依存している者は従わざるを得なくなるということを教えてくれたのだから。

「じゃあ、きつと告白してね？」

「わかりました」

パソコンをかばうように抱きしめて、姉はうなずくのだった。

羊は裏切らない？（前書き）

ちよつとネタが出てきます。

羊は裏切らない？

姉は二トだ。

高校卒業と同時に引きこもりを始め、まったく働く気のないダメな人種である。

しかも、アタシとの思い出が詰まった望遠鏡で御近所の覗きをやっていたのだ。思い出を穢された気分だ……………。

それはさておき、これはチャンスなのである。二次元にしか興味がなかった姉が、三次元の人間。それも異性に興味を示したのだ。姉は覗き魔だったという事実をしっかりと受けとめ、心の中で誓った。

——絶対にこの恋(?)を实らせてやる！

ちょっと思考がずれているかもしれないけど、構わない。

無茶苦茶だつて？ 意味不明だつて？ それがどうしたつていうのよ。

コミュニケーションが苦手で人見知りする姉が誰かと付き合えるようになることが大事なのだ。

きっとそうなれば、二次元にのみ目がいつちやっている姉の心を正すことができるはずである。あまりにも無理のある理屈かも知れないけど、アタシは試さずにはいらなかった。姉がこのまま落ちぶれて行くところをみたくないからだ。

まず、アタシが始めたのは姉が望遠鏡で覗いていた家の調査だ。メル友などから情報を集めてわかったことがいくつかあった。

彼の名前は橘龍之介、通称『のすけ』で通っているらしい。そこ

は、リユーとかリユウじゃなかるうか？ と疑問におもっていたけど別にどうでもいいので脇においておくことにした。あだ名なんてその場の空気とかノリでできるものだしね。

彼は高校二年生で勉強はあまりできるほうではないらしい。部活動はやっていないそうだ。

家族は母と妹の三人暮らし、父親の話はまったくわからないので離婚したのか、はたまた亡くなってしまったのかもしれない。だれも、聞いたことがないらしいのだ。

「お姉ちゃん。聞いているの？」
「聞いてな〜い」

姉が気になる男の子のプロフィールを読みあげていたのに、まるで興味を示していなかった。デスクトップのディスプレイを眺めながら、マウスを操作してクリックをするという作業を続けていた。

ここは異臭が漂う姉の部屋。

相変わらずくしゃくしゃのティッシュが床に散らばり、部屋の隅には埃がたまっているのに、マンガやゲームは新品同様に管理されているというアンバランスな感じの部屋である。

アタシはそのベッドに腰掛けていた。布団が軽く湿っているのは姉が朝から夕方まで、ずっと布団の中で寝転んでいたからだ。はつきり言う汚い。布団が湿っても気にしない神経は、アタシにはとても理解できないものだった。

「なにしてるの？」

「羊の毛を刈ってるの」

最初こそ、彼のプロフィールをタイピングしてメモしていたのに、いまではネットゲームに興じていた。

わずか、五分ほどで興味を失われてしまった。

「ちよつとなにしてるの！ アタシと約束したよね？ 覗きをやめて、告白する努力をするって」

「やっぱりヤダ！ 三次元は裏切るもん！ 期待と全然違うにきまつてるよ！」

「まったくもう。そんなの当たり前でしょ」

すべてが期待通りだったら、人生に絶望なんてしないはずだ。

「相手が何をかんがえているのかなんてわかんないし。わたしには二次元が似合ってるんだから、放っておいてよ」

ディスプレイのキャラクターを操作しながら、姉は羊の毛を刈っていた。これは、何をするゲームなのだろうか？

「羊だけは、羊だけはわたしを裏切らないんだ！」

キャラクターは新たな羊毛を求めてバリカンを振るう。するとどうだろう、羊が一步前に進んでバリカンが空を切る。そして画面には白い文字で『採取に失敗しました』と上がった。

「しつかり裏切られてるけど？」

「ち、違うもん！ いまのはわたしがタイミングを逃したただけなんだから！」

よほど悔しかったのか、マウスの左クリックを連打して羊毛をとろうとしている。

「まったくもー。どうでもいいけど、お姉ちゃんが言うとおりにしないなら、覗きの事実を警察に通報して、パソコンのメモリを壊すからね」

「脅迫だ！ 妹が姉を苛めるよー！」

「お姉ちゃんがダメすぎるからでしょう」

四年間も引きこもっていなければ、こんな真似はしなかった。まさかアタシが中学を卒業してから引きこもり続けるとは予想外だった。

「でもさあ、ゲームと違って現実では不測の事態が何度も起きるから怖いんだけど？」

「それは克服して、だれだってある程度は不安がってだれかと付き合って生きてるんだから。ね？」

肩に手をのせて伝えてあげると、姉は露骨に嫌そうな顔をした。なんで？

「そんなことしてまで付き合いたくないし」

「お姉ちゃん。それ以上言ったら、アタシの手が滑ってキャラクターのアカウントが消えちゃうかもしれないよ?」

「ちよっ!? やめて! 課金なし、サポなしでボスを倒し続けたわたしの苦勞をすべて消すことになるんだよ!」

何を言っているのか理解はできなかった。サポってなに? アイテムかな?

「話を戻すけど、お姉ちゃんはその龍之介ってひとに告白する」

「ええッ」

「面倒くさそうな声をあげない!」

キャミソール姿の姉は唇を尖らせる。尖らせたいのはアタシのほうなのに。

「お節介だとおもうけど、アタシはこれ以上、お姉ちゃんがニートでいることに耐えられないの! ニートの姉などもう要らんッ!」

言い放つと、姉は不機嫌な顔してマウスのホイールを中指で「ガリガリ」と引つ掻いていた。

不服のご様子だったので、アタシはノートパソコンにそつと触れる。すると姉は首をぶんぶん横にふっていた。素直でよろしい。

インターネットをあまりしないアタシにはわからないけど、この家電製品を破壊されると生きている意味が半分くらい消失するらしい。と教えてもらったのだけど、姉の態度から察するに、あながちウソではないみたいだ。

「はあ、パソコン如きでここまで必死になるなんて、妹として情けないよ」

「如き!? なんと恐れ多いことか! パソコンがなくなったらいまの人類大変なことになるよ! インターネットの甘露が味わえない生き地獄を見た人々が自殺しまくっちゃうんだから!」

いや、ありえないとおもうけど。

姉は息も絶え絶えというくらいに叫んだので、すこしだけ信じこみそうになってしまった。家電製品がひとつなくなっただくらいで人間は自殺するものなのだろうか? アタシはドライヤーや電子レン

ジがなくなつたほうが困るけど。

おっと、いまはそんなことをかんがえている暇はない。早速この龍之介なる人物にアプローチをしなくてはならないのだから。

今回アプローチをとるのは姉ではなくて、アタシだ。

姉が絶対に家から出たくないと申し立てるので仕方なく妥協したのである。本当なら、その少年と一緒に公園やファミレスとかでお喋りしてもらいたかったのだけど、パソコンを人質にとつたのに渋られたので諦めた。

「はあ、一応はアタシと同年だから、すこしは話を聞いてくれるとはおもつんだけど」

「だといいね。聞かなくてもわたしはあんまり興味ないけど」

「当事者が興味ないって、なによそれ」

「だってー、三次元は裏切るんだもん」

「さつき羊に裏切られたひとの言葉とはおもえないけど？」

「うくつ。とにかく、わたしは裏切られるとおもったらもうそのひとと会わないからね。オーライ？」

「オーライオーライ」

「趣味が分かち合えるひとならいいんだけどなー」

「大丈夫、きつとわかりあえるよ」

趣味がわかりあえるかどうかは、とても不安が残るところだった。なぜなら姉は趣味もさることながら、相手がそれを理解できなかったら相手とわかりあえないとおもってしまうタイプだからだ。

「お姉ちゃんも龍之介も、カップルになれるって！」

とても先が不安だったけど、アタシは自分を鼓舞するためにそう言った。

アプローチをした結果、かなり意外なことが判明したけど、それはまた別の話。

仕組まれた出会い

歩きながら、偶然を装って橘龍之介と接触することができた。
これは龍之介と親しい男の友人のご協力があったおかげだ。

段取りはこうである。

まず、その男子が龍之介と街をぶらつこうと誘う。そしてアタシと出会うと三人でファミレスにむかう。ここで男子には適当なことを言って退場する。つまり、アタシと龍之介は二人きりになるのだ。あたりまえだけど『二人きり』の言葉に変な意味合いはない。

すべてが台本通りに進むと、男子は携帯電話を持って「用ができたらからちよつと行ってくる。ごゆっくり」と答えた。

アタシは既に注文を終えていて、龍之介も注文を終えている。注文をしたから帰るに帰れないという状況をつくった。汚いということなかれ、アタシはどんな手を使ってでも姉と龍之介を会わせて見せる！

「じゃあ、オレはこの辺で、悪いな」

ともに台本を組んだ秋元君はこちらに一度笑うと、アタシは親指を立てた。歯磨き粉のCMみたいな白い歯が印象的だった。

茶番劇は終わった。報酬は明日の昼食を奢るだけだ。

「あゝすみません。見知らぬ男子と二人つきりなんて。あいつ、なにをかんがえているのやら」

目の前の優男はそう言った。

なんだか痩せていてなよつちい印象を受ける彼こそが橘龍之介そのひとである。失礼だけど、結婚したら女のひとの尻に敷かれそうな顔をしていた。

「わけのわからない野郎と一緒にになるとは、あなたもついてないで

すね」

冗談で作った渋い顔をしてきた。
すみません。

この状況を作ったのはアタシなんです。

「いえいえ、とんでもないです」

アタシもワザと変な顔をしてそう言うと、彼は笑いもしない。女特有の情報には表情があまり変化しないと聞いていたけれど、本当かも知れない。

どちらもそれきりで黙る。

何を話したらいいのかかんがえあぐねているようだった。

アタシが口を開こうとしたときに、携帯電話が鳴った。アタシの
ではない、龍之介のカバンからだ。

「ちよつと失礼」

龍之介はカバンのなかからブックカバーのついた文庫本を『五冊』
とりだした。そしてその奥にしまいこまれた携帯電話をとりだすと、
メールを確認していた。

「龍之介くん、いつもそんなに本を持ち歩いているんですか？」

文庫本とはいえ、普通の高校生がバックの中に五冊も入れるだろうか。趣味は読書かもしれないけど、そんなことを聞いたことは一度もない。

「はい。まだありますよ」

などといって、制服の内ポケットから一冊、さらにポケットから一冊とりだした。すべて文庫本で書店で買ったときに無料でついてくる紙製のブックカバーをつけられていた。

「何を読んでいるんですか？」

「ああ、これ？」

すつと差し出された文庫本を捲ると、一番最初に刀を持った少女が黒い怪物と斬り合っているカラーイラストがお出迎えしてくれた。ほかの文庫本もすべて、出だしはカラーイラストでキャラクター紹介みたいなものが書かれていた。これはたしか『ライトノベル』と

呼ばれる中、高校生をターゲットにしたものでアニメ化や漫画化していると聞いている。

「これ、女のひとが読むものじゃないんですか？」

言った途端、彼は渋い顔をした。

「いまの女のひとは何かとそう言うんだけさ。これの初代はゲー△関係の小説ばかりだったのですよ。ついでにいうと、これは基本的に男性が読むモノが多いんです。その証拠に女のひとが主人公であることは本当に稀です」

「はあ」

よくわからない。

「なぜいまの女のひとは唐突に『週刊少年』と書かれているマンガですら『え？ これ女が読むものでしょ？』なんて言うんでしょうか。色々と納得がいきませんよ。ぶっちゃけた話、ずっとマンガを読んでる男子をバカにしてくせに、いきなりハマっちゃうんですから、そう言うの食わず嫌いだとなぜ気づかないんでしょうか。最初に文句を言わずに読んでから批評すればいいのに」

「は、はあ？」

な、なんだろうか。

とてつもなく触れてはならないことに触れてしまったような気がした。

「や、あなたがそう言うのもわかるんですよ。最近のラノベは表紙はみんな似たり寄ったり。すべてヒロインがデデーンと大きく書かれているばかりで、男性主人公が目立たず無茶苦茶強いヒロインが男性を守っていますからね。そうも見えるかもしれませんが」

「え、ええ？」

同意、するべきなのだろうか？

「ラノベというと、昔にライトノベルをラノベって略すのってあぶなくね？ みたいなことを言っていたひとなんかいまはラノベって言ってますから。不思議ですよね発展って」

「あの、その」

「まあぶつちやけ物語読むのに性別なんて関係ないでしょ。だって楽しんだ者の勝ちなんだから、男が少女漫画読んだって女が少女漫画読んだって俺はまったく気にしない」

最初からそれが言いたかったのだろうと気づけたはいいけど、これ以上長引けば彼のワンマンシヨウになってしまう。

「おっと、ごめんなさい。俺ばかり喋ってましたね。お恥ずかしい」相当に熱くなっていたけど、アタシはそこに触れないことにした。「ウチのお姉ちゃんも、ライトノベル読んでるんですよ」

「へえ」

興味をいだいたのか。彼は相づちを打ってライトノベルをカバンにしまい始めた。

店員さんが持ってきてくれたコーラを飲みながら、龍之介は言った。

「しずくさんは何か読むんですか？」

「読みますけど、基本的には海外書籍ですね」

「ハリポタとか羅針盤ですか？」

「あ、それも読みますね」

「羅針盤は動物が愛らしくてつい読んじゃいますよね」

お、その気持ちはちよつとわかるぞ。

映画版でもずっと主人公の身を案じてくれてる健気なすがたが多く描かれている。あるいは助けを呼ぶ情けないすがたが。とにかく、互いを案じているたしかな絆を感じることができるのである。

「ええ。あれはいま三冊目を読んでいますね」

「へえ。ハリポタは最終回がZガンダム並にひとが死にますよねー」

ぜ、ぜーた？

なにそれ？

その気持ちはちよつと、わからない。

わかったのは彼が本が好きそうということくらいだった。

よし！ ここはジャブを打ってみるか。

姉に会ってもらえるように段取りを決めてと——これでいいかな。

頭の中で台詞を組み立てると、アタシは深呼吸してから口にした。

「ウチの姉に会ってくれませんか？」

いやあああ！？

最初は『姉がそういうのに詳しいんですね』って言おうとしたのに焦りすぎた！

ジャブどころかアッパーを打ってしまった！

「どういうひとですか？」

彼は顔をしかめることもなく、聞き返してきた。

これはもしかしたら——イケる？

「二十二歳で、大学に行かないで家に引きこもってます」

ヤベ、普通に答えを言ってしまった。

しかし彼はやっぱり平然としていた。

「なるほど」

「そんな姉ですけど、会ってもらえませんか？　お願いします。どうか、一目でもいいのでお会いしてください！」

アタシは段階をふまえるということを忘れ、頭を下げて頼んでみた。そうすると、すぐに彼はうなずいた。

「俺でいいなら構いませんよ」

マジですか！？

拝み倒しの効果が、それともこの龍之介なる人物の人柄なのか。交渉は円滑に進み、終了した。というか、十分経っていない。

もっと長丁場を想像していたのに、安堵の息を吐ける時間はすぐ

に訪れた。

「あ、でもお願いが」

龍之介はコーラのストローに口をつけながら言った。

「俺とは敬語使わないでもらえるか？ 俺も敬語使わないから」
ん？

彼は興奮していたときと似た口調になった。

どうやら、さっきまでは態度に気を使っていたみたいだった。

「わかった。アタシも敬語は使わないから、あなたも使わないで龍之介くん」

「面倒だし、のすけでいいよ」

のすけは笑みも浮かべず、ただコーラを飲む。美味しそうに飲んでいるというよりは摂取したいからしているみたいな機械的な印象を受けた。

「でも、どうして会ってみることにしたの？」

せっかく携帯電話で写真をとったのに、見せる暇もなくオーケーサインが出たのだ。疑わしくもなる。

「いや、だってさ。情報だけじゃ相手がどんなひとなのか判断できないだろ？ 情報はそのひとの『人柄』とか『性格』じゃない。実際に見て、自分で感じないことには相手がどんなひとなのかハッキリしない。だれかの意見だけ聞いて自分の意見をあげないなんて、盲目的すぎるだろ」

発言を鑑みるに、のすけは中身を重んじるタイプらしい。ありがたいような、ありがたくないような。

だって、ねえ。

アタシの姉は、あんなだし、初日で破局だけはなんとも避けたいけど、絶対にテンパるだろう。相当にピンチかもしれない。

アタシの心の中を察したわけではないだろうけど、のすけは笑った。

そして、もう一つの理由を教えてくれた。

「それと」

「それと？」

「ラノベの話ができる友達は男ばかりだから、女のひとともそういう話がしてみたかったんだよな」

なるほど。なんとなく納得した。

「とりあえず、会うのは次の休みでいいかな？ できればそっちの家で会いたいんだけど」

「えー！？」

「ん？ 変なこと言ったか？」

「いや、次の休みって明日っ」

あまりにも早い決断だったので、ちよつとビックリしてしまった。アタシの様子を見て、彼はわざとらしく顔にしわをよせた。

「あちゃ、都合が悪いならその次の休みにしよ——」

「大ジョブつぶです！ だ、大丈夫ッ！」

身を乗り出すように前かがみになって了解した。

「あ、本当に。無理してない？」

「いやもう是が非でもお招きしますから」

のすけはコップを傾けて氷まとめて口に入れて、噛み砕いて飲みこんでから口を開いた。

「ありがとう。楽しみにしてるから」

「でもいいの？ ウチの姉を気に入るかどうかはわからないよ？

容姿は凄くいいとは言えないし」

「見かけよくても中身最悪だったら、見かけ悪くて中身最高のほうがいいよ。俺の好みはぶっちゃけない。性格以外は何も考慮に入れてない。だから、いままで女の子とつきあったことってあんまないんだ」

「へえ。そうなんだ」

想像以上に中身だけを気にするタイプのようにだ。

ある意味では外見で判断するタイプよりも面倒だった。姉の容姿は中の下くらい。けれど、中身がニートなので初見でアウトになるかも知れない。

「愚痴っぽくて飽きっぽい拳句に責任もとらないで全部ひとのせいにするんだ。やってらんないって。女友達に気になる子はいたけど、彼氏いるから手だしできない」

お、彼女が欲しいような口ぶりだぞ。これはいけるかもしれない。てなわけで、会ってみないとどうとも言えない」

ちよつと長い話だったけど意志はしつかりと受け止めた。

本当に性格以外どうともおもっていないという口調だった。たぶん、アイドルとかに興味ないというのも本当なのだろう。彼は目の前にいない女性に熱を抱くことはないとアタシは確信した。

「じゃあ、今日は俺のおごりってことで」

「いやいやいや、アタシが奢ります！」

「ダメダメ、こっちにも目論見があるんだから」

普通、目論見があるのに口で言ったりするものだろうか？

やや間をおいてから、のすけはわざとらしい笑顔を向けた。

「女の子の手料理、男なら興味あるとおもわないか？」

なるほど、そういうことか。次の日の休み、何か作ってくれと言っているようだった。作るのはやっぱり姉だろう。幸いなことに、姉は昔に料理を得意としていたのだぶん問題はない。数年間台所に立ってないから腕は錆びているかもしれないという不安はあったけど、なんとかなる。

「じゃあ、お願いしようかな。ゴチになります」

相手の目論見を理解して、アタシはあっさりと折れた。

のすけは上機嫌で勘定をすませると、アタシと一緒にファミレスを出る。彼は別れ際に、一言つけくわえた。

「ところで、しずくはそのお姉ちゃんが好きなのか？」

微妙な質問だった。

「うーん。嫌いではないけど好きでもない。微妙？」

「そうなのか。わかった。じゃあ、明日連絡くれよ」

「あ、うん。うん？」

最後に、のすけは初めて普通の笑みを浮かべていた。

その笑みの意味がなんなのか、アタシには察することはできなかった。

アタシがのすけの背中へ声をかけようとしたけど、のすけの近くに黒い服を着たいかにも堅気ではない面子が数人歩いていた。

「のすけじゃねえか！ 久しぶり！」

え！？

「よっちゃん久しぶり！ 元気だった？」

ヤクザとおもわしき男と平然と会話をしているのすけを見て、アタシはちよつとした不安を抱くのだった……。

のすけ、我が家に来る

姉は二トだ。

働くという言葉に絶対的な拒否反応を起こす劣悪な人種である。しかし、そんな姉にも好機が訪れた。というかアタシが作ったのだけど、それは些細なことだと思う。

待ち合わせのコンビ二前にいた橘龍之介ことのすけを我が家に連れてきた。幸い、両親はいない。銀婚式とやらでハワイ旅行に行くと言いだしたのだ。あと四日は帰ってこないだろう。もしも姉がのすけの覗きをやっていたことがなければ、羨ましがっていたかも。

両親はいない、これは、絶好のチャンスなのである！

しかし、ひとつだけ不安があった。それは、姉の部屋の汚さだ。なんか変なにおいがするし、とても他人が踏みいるような空間ではない。だから、掃除をするように言っていたのだけど、果たしてどうなるか。

ちなみにのすけはというと。

「年上の部屋かぁ。ううッ、緊張する」

なんかテンションが高そうというか、遠足を明日に控えた少年みたいな声を出していた。

きつと彼の頭の中にはピンク色の布団とカーテンが部屋の一角をしめ、机の上にはぬいぐるみが並べられている綺麗な『女の子の部屋』でも想像しているのだろうとアタシは思った。

現実と理想のギャップに驚いて逃げ出さなきゃいいのだけれど。もしも逃げたら………何もかもおしまいだ。

「ここがしずくの家か？ 俺の家とあんまり離れてないんだな」

そりゃそうだ。徒歩でおよそ二十分〜二十五分。自転車ならもっと早い。

「なら、覗かれないようにカーテン閉めとこつと。のすけもアタシたちに覗かれないようにカーテン閉めておいてね」

気の利いたギャグを言うつもりだったけど、口から出てきたのは遠回しな忠告と犯罪の告白だった。

アタシの姉は心の中でひきつった笑みを浮かべてしまった。

彼はうなずいた。ギャグは受けなかったけど、カーテンについて思うところがあつたのだらう。彼の部屋のカーテンは、大抵は開いているようだから……。

「お邪魔しますつと」

「どーぞ」

家の中に入る。

真っ先に向かうのはリビングでもなく、アタシの部屋でもない。

姉、ちずるの部屋だ。

「お姉ちゃん。連れてきたよ〜？」

「あ、どうぞとどぞ」

どもりすぎ。

おめかしする必要はないと言ったけど、ジャージはあんまりじゃないだろうか。

緑色のジャージで身を包んだ姉は、覗いていただけの異性が部屋に入ってきたからか慌てふためいていた。

「お姉ちゃん、食材は冷蔵庫に入ってるから。お腹がすいたら適当に昼食を作つてね。あとは若い者同士つてことで」

姉から一瞬、薄情者！ という視線が送られてきたけど。アタシがここにいたらお見合いが成立しない。実際は、ただ会ってもらっているだけなんだけどね。しかし、これでイイ関係が築かれるのを

祈るばかりである。

アタシは姉の部屋の隣。自分の部屋に入るとあらかじめ用意していたガラスのコップを手にとり、壁に当てると、耳をコップの底に当てた。盗み聞きはよくないことだけど、これは仕方ないんだ。仕方ないったら仕方ないんだ。興味がなかったわけじゃないけど、とにかく仕方がない。

アタシは何かに言い訳しながら、生唾を飲み込んだ。

『敬語でいいですか？』

『え？ いや、タメでかまいません』

姉は初めてのひとに興奮しているのか、ちょっと可愛らしい。でも、やっぱりどもりすぎ。

『わかった。あ、これ望遠鏡じゃん』

『あ、うん。昔、買ったの』

『へえ、天体観測？』

『ここからあなたを見ていて——いやいやいや間違えましたごめんあさい』

ちょ！？

いきなり犯罪トークは駄目だってば！

このままじゃ姉が二トどころか臭い飯を食べるようになってしまつ。上手い言い訳を考えながらドアを開ける準備をしたら——

『ええ！？ 俺なんか見てて楽しいか？』

『今月の初めから覗いてて、なんか好みだなんて——ごめんなさい訴えないで！』

訴えないで！

アタシと姉の気持ちが完全に一致した。

今のアタシと姉ならば、地面に落ちたミルクだって飲み干せる。

『え？ 何で俺が訴えるの？』

アタシがギャグマンガみたいにならずにこけたのは、きっと生涯初めてだろう。

『……怒ってないの？』

『ん？ 別に見られても困るようなことしてないし。今月は』

あの男、まったく気にしてねえ。

しかし『今月は』とはどういう意味だろう？ もういい、この際だから気にしない。

コップの底に押し当てた耳の体温で、コップが少しずつ暖かくなっていた。

『でも驚いたな。俺って覗かれてたんだ』

『……うん』

何事にも無関心という情報に偽りはなかった……。

いや、でも普通自分の家が覗かれてたら気にするよね。

『俺は望遠鏡では輸送機しか見たことないな。人を望遠鏡で見るのは楽しいか？』

は？ 輸送機？

『え？』

『俺は望遠鏡では輸送機しか見たことないな。人を望遠鏡で見るのは楽しいか？』

いきなり、彼は嫌味つたらしい口調になった。

ああ、やっぱり怒ってないっていうのはフェイクだったのかな？
この先の未来を想像して、アタシは絶望を感じていた。

『楽しいのかって聞いてんだよ、バカ』

なんか、ワザとらしくドスを聞かせた声だったな。ひょっとして
何かのモノマネ？

え？ マジで怒ってないの？

『ガウルンっ！ お前が殺しを楽しむのは勝手だが——じゃなかった。いや、その……………うん』

『そっか。じゃあ、今度は俺がちずるさんの家を覗こうかな』

『えっ！？』

『ウソウソ、捕まりたくないし』

のすけの口調はいつも同じ感じなので、何が冗談なのかわからない。今のはたぶん、冗談なのだろうけど。アタシとしては気が気でない。

『覗きか……………覗きと言うと……………うる星ではあり来たりすぎるな……………「きみの兄さん、電線のうえで感電死してたんだって？ そんなところでなにやってたんだ？ のぞきの趣味でもあったのか？」かな』

『ああ！ それノベライズ版の台詞！』

『あの作品は後世に残るモノだよ。マ・クベの白磁の陶器みたいに『いやいや！ キシリア様からいただいたのだ。どこるかハマーン様のにおいをつけてコーティングした薔薇と同等の品だよ！』

『あゝたしかに。持つてるだけでクイン・マンサに特攻できそうな決意と覚悟が体内からばーっと出る感じがする』

？

????

????????

え？

なに？

今のつて驚くところなの？ 感心した声をあげるとこ？

アタシには少しもわからなかったけれど、二人のチャンネルはしっかりと繋がっているらしかった。

しかし、ハマーンの名には聞きおぼえがある。前に友達と一緒にゲームセンターに行くと、男のヒトが群れているゲームの台で「ハマーン様！ ばんざーい！」とか聞こえた気がする。ゲームのキャラかな？

それから——三時間が経過した。

アタシにとっては何の話をしているのか一切つかめない。しかし、彼と彼女は完全に話題がはねあがっているらしく。ふたりに言わせれば『重力から魂を解放された』状態らしい。

はねあがるどころか、地球から飛び出してしまったということだけはわかった。

『よく知ってるね』

『伊達にアニメは見てねえぜ！』

『ゆーすけえ！』

『お前、まだ自分が死なないと思っているんじゃないだろうな』

『100% 弟か！』

えええ。

アニメの台詞を暗記しているのか？ それともそれっぽい台詞を述べているのかは知らないけれど、いつまで話すつもりなのだろうか？ 女の手料理に興味があるのではなかったか。今は女とのサバカル話で盛り上がっているようだけど……いいのか、のすけ。

——六時間経過

そろそろコップを持つ手が限界を訪れようとしていた。

ふたりの話題は未だに続いている。映画や漫画、アニメやゲームなどと言った娯楽の話のようではあるけど、アタシには呪文にしか聞こえない。

てか休みなしでこんなに喋れるか普通？ ちまたのガールズトークですらも四時間も立てばテンション下がってくるだろう。

『いや、オストラコンを知っているとは……侮りがたし女子』

『ふっふっふ、エメドラはノベルも全部、読んだしね』

『ノベルも？ はあ。あれも一応は異種愛だったよな』

『でもアレって人間になっちゃったじゃん』

『最終的にはただの愛になったのが残念で仕方がない』

『そだね。異種愛の一番長続きしそうなってドラドラじゃない？』

『え？ チビとレイ——ああ、カイムの方が』

ドラドラは複数あるらしい。

麻雀、あるいはドラえもんだと思っていたアタシの推測は完全に外れていた。もう、推測するのはやめよう。絶対に分かりそうにな

い。

——七時間経過

アタシは気力と根性を振り絞ってコップを持っていた。
そんなことを知らないであろうふたりは、テンションあがりまくっている。

『愛と勇氣は』

『ことばー!』

『お城の屋根から見上げた』

『輝く満月綺麗!』

『いとしーさと』

『せつーなさと!』

今度は色々なソング——アニメやゲームの主題歌など——の一部を歌ってもう片方が続きを述べることで得点を競い合うと言う知識がなければついていけない勝負だった。

アタシは『忍たま』のオープニングしかなかったよ………
…。

——八時間経過

ふたりとも飲まず食わずでヒートアップ、格闘ゲームをやっているのか色々コミカルな打撃音がした。

『まさかルーミをこの部屋で使うことになるうとは！』

『ふ、ギョンターに勝てるかな？ 坊や』

『舐めるな！ 小娘！』

『甘い。甘いよ！ チョコレートより！』

『お、玩具にされてる！』

勝敗が決したらしい。

『クソ次は勝ってやる』

『その台詞はもう2回目だよ』

『うつ。それはともかく、このゲームは絶対に時代を間違えたと思うぞ』

『そう言わないの。歴史を見れば出現する時代を間違えたゲームもアニメもいっぱいあるじゃない。そのせいで、打ち切りになり、マインナーになった』

『世知辛いな。今だったら、って名作は山ほどあるのに……』

『祈ってあげようよ。ラオウと力石の葬式をしたファンみたいに』

なんか、妙な空気が漂っている中で、格闘ゲームの打撃音は嫌に生々しく聞こえた。

ラオウと力石は流石のアタシも知っている（見た目だけならであるが）。ただ、ファンが葬式を行ったということは知らなかった。

架空の人物にまでお経をあげるのはいかがなものか。

——九時間経過

両手がしびれた。

耳たぶが痛くてコップが汗で湿っている。

もう無理、この体勢もう無理……………。

『ふう、指がつかれた。まさかあんなにゲーム持つてるとは。今度一緒に何かコンプリートしようん。いいね。また来なよ』

「なんですと!？」

脊髄反射の勢いで声をあげた。慌てて口を押さえるが、意味がないのはわかっている。

これは、イける! マジでイけるよ!

『ちずるさんってさ、特撮は見る? ライダーとか』

『ライダーとか……見るけど』

『ZOのビデオ持つてるから今度一緒に見ない?』

『え!? ZOなの!? 見る見る』

聞いたことないライダーだった。真までだったらギリギリ見るんだけど。

『あとキカイダー』

『あ、それはいいや』

『——のライバルのハカイダーが主人公の映画を持つてるんだけど』

『是非に観よう!』

『じゃあ、また今度会おう。あ、携帯番号教えて』

ナイス！

『あ、パソコンメールでもいい？』

ガクンッ。

そっちかよ！

『いいよ。ありがとう。今日は楽しかった』
『うん。わたしも』

部屋から出てきたのすけは、うつすらと汗を掻いていた。

アタシは何食わぬ顔で彼を途中まで送ると言った。

彼が家に来たのは十時ちょっとすぎ、今ではすっかり日が落ちていた。恐るべしふたりのネタトーク。

肌寒くなった住宅街を歩きながら、のすけは言った。

「いやあ、面白いお姉さんだね。うん、可愛いし」

「肝心の中身はわかりそう？」

聞いてみると、手を振られた。

「そう簡単に分かるわけないだろ。でも、第一印象は悪くないかな。ちよっとテンパってたけど」

あとで知ったのだけど、ごめんなさいと言った姉は土下座していたそうだ。というか、それすらもスルーしたらしいのすけって一体……。

「でも、お姉ちゃん最初はたぶんだけど、俺と会うことに乗り気じゃなかったんじゃないのか？」

ピンポイントである。

まさに、姉は嫌だと言っていた。なぜ分かったのかは知らないけれど。

「うん。言ってたよ」

「どうしてだ？」

「三次元は期待と違うにきまつてゐるって」

「あゝ気持ちは理解できるな。俺もそう思ったことは何回があるしあるんだ。」

アタシは期待が裏切られたことはあるけど、二次元と比較したことはない。

「それに裏切られそうだと思ったらもう二度と会わない。なんて言ってたからどうなることかと思ったけど、大丈夫そうだね。また会う約束をしたんだし、ね？」

ウィンクしてみると、彼は目をぱちくりとさせた。

「裏切られそうだと思ったら？　はあはあ」

のすけは、得心いった、とばかりに両手をたたいた。

彼は何かをつかんだようだ。それが一体何なのかはわからないので、アタシは首をかしげるばかりである。

「どうしたの？」

「何、ささやかな疑問が解けたんだ。アトルシヤンは浮気者。アンヘルは一途。どっちもドラゴンなのにね。きっと男の愛って冷めやすいんだ」

なんのこっちゃ。

無理矢理に場を戻すため、アタシは咳払いをした。

少しもよくわからない空気を飛ばすことはできなかったけど、アタシは言った。

「のすけからもお姉ちゃんに働くように言つてよ」

「働くように、ねえ」

どこか意味ありげに言うのすけの顔は、ぴくりともしなかった。

「やっぱり、応えてもらえない？」

アトルなんだかとアンヘルとかいうのは、きっと誤魔化すためのウソだ。

彼は、感づかれてしまったかとはかりに頬を掻いていた。

「別に言ってもいいけど、問題はそこじゃないとおもうぞ」

「それってどういうこと？」

「ちずるさんはたしかに働くことを相当にいやがってるみたいだけどな。それ以上に他人と関わることを嫌っているってこと。俺と最初にあって意気投合できたのは、マンガやアニメを知っている仲間がここにいる。っていう意識があったからだ。もしもそれがなかったら、たぶん会話が成立しないまま二度と会うことはなかったとおもう」

それはあり得る話ではあった。

でも、姉がそこまで他人を嫌っていると記憶してはいない。どういうことだろうか？

「何かあったんじゃないか？ ある程度の察しはついたけど」
「知ってるなら教えてよ」

「だーめ。これは似たような心境に陥ったことないと理解できるもんじゃない。可愛そうだって同情されるとムカムカするだけだし」
「可愛そう？ 同情されるようなことなの？」

「おっと口が滑った。俺はこれ以上喋らないから」
それっきり、のすけはウンともスンとも言わなくなってしまった。どうということなのか。本当にわからない。

姉は勉強ができて、少ないながらも友達がいる。引きこもった理由は働くのが面倒だからのはずだ。いままで勉強に時間を費やしていたのだから、青春を謳歌してやる。というはずだったとおもっただけ。

ひょっとして、ほかに理由があるのだろうか？

待ち合わせ場所のコンビニでのすけと別れた。

アタシは家に帰っても、彼の言葉がなんだったのか、かよくわからなかった。

アニメはドリルで締めくくる

姉はニートだ。

働くという単語を聞いただけで拒否反応が出るダメダメな人種である。

最近、そんな姉に新しい友達（？）ができた。アタシとしては初めて三次元の異性に興味を持ったであろう姉に初めて最後の春が訪れる瞬間だとおもっていた。

ついこの間に、絶対にこの恋（？）を实らせてやる！——と意気込んでいたんだけど、ちよつとめげそうになっていた。理由は、いま一緒に観賞しているアニメにある。いや、最初は特撮モノから始まったのだ。

なんでこんなことになつちやつたんだろう……………。

いまいるのは姉の部屋。姉が劇場版アニメのDVDなどを買ったときに大きな画面で見たいという理由で購入したホームシアターにて色々なモノを観賞していた。なぜか、アタシも含まれているのだ。すけが強引にさそつたのである。ノリノリになった姉も「すこしは二次元に触れる！」とアタシを異臭がただよう部屋に連れ込み、しぶしぶと一緒にアニメを見ていた。

アタシとしては最初に見た『ハカイダー』なる特撮モノの最後の部分にあった『敵の背中パーツの一部を引き千切り、首を落とす』だけでも十分グロかつたのに。

『せいぎ、わたし……………、せいぎ、わたし』

などと敵のロボット（サイボーグなのかな？）の生首が床でつぶやく姿はあんまりいいものではなかった。作りものだとかつているのに、嫌な気分になってしまふ。エイリアンの一作目に出てきたアンドロイドの生首を思い出してしまった。

けれど、そんなのは序の口だった。

いまではもつとグロいアニメを鑑賞させられていた。

『聞けよコラア！』

「ひいつ！？」

縛られた少女の顔面を平手打ちする鬼のような形相をした少女。すこし前に包丁で自害した少女に『この拷問狂』と罵られただけはある。彼女の手口は悲惨で惨い。一体何をどうすればこんなことができるキャラクターをかんがえることが出来てしまうんだろう。今のこの少女は人間じゃない。鬼だ。鬼になってしまったのだ！

耳を塞ぎたくなるような効果音と息使い、そして命乞い。手に嫌な汗がにじんできた。そんなアタシの隣では、呑気にポテトチップスを齧っている姉とのすけの姿があった。なんでこんなに平然としてんの！？ いま礫にされた女の子がナイフで刺されてんだよ！？ うわ、めっちゃ左右に揺れてるし鬼少女！ てかドアップで表現しないでよ！ こんなのはびっくりやつてるからアニメ規制なんて言われちゃうんだ！

「おっ、さらに始まった」

「ナイフでじゅぶじゅぶ肉を刺すっ」

ポテチを齧るのすけ。

コーラを飲む姉が呑気に言う。

うげええ！？

なんて酷いことをするんだ。血が！ 血が！ 血がビシャビシャ

とんでるわよ!?

「幼女、終了のお知らせだねー」

「そうだな。このシーンだけ見るとこのアニメは完全にグロをウリにしてるよな。まあ、それがあっての『悲劇のあとの感動シーン』が盛り上がるんだけど」

ええええええええ!?

こんだけ残虐に少女を殺してるのに、このアニメ最後はハッピーエンドになるの!?! 殺した時点で収集がつかないじゃない。最初のほうは見えていないけど、姉とのすけが言うには『ひぐう名シーン観賞会』らしい。女性が撲殺されたり男性の頭が真つ二つになったりとグロテスクなシーンのオンパレードだった。部屋に帰りたい……。

「いままで殺されてた人が、その。い、生き返るの?」

「まさか、そんなわけないでしょ、しずく」

姉は笑って手を振った。

そうこうしている間にアニメの話は進んでいる。

なんと、今度は殺した少女の兄の言葉を思い出し、失禁しているではないか。うわああ、凄い形相になってる……………。

「ある意味では『ムネモシユネの娘たち』よりはマシだよな。あのエログロアニメなんで制作されたのかもちよつと疑問だし。ま、面白かったけどな。レズシーンはちよつと苦手だったが」

「あああ、トキジクの実は僕だけしか食べちゃいけないんだよ。だね。たしかに初っ端にショットガンでお手を吹っ飛ばす超グロいシーンから飛ばして、あとでレズシーンやエロシーンを盛りだくさん。でも殺すって凄まじい内容だったよね。最終話手前で主人公が死んだときにはどうすんだっておもったよ。寝取られてたし」

ええええええ!?

そんなものばかり作ってるからアニメに規制を入れるという声があがるのではないだろうか?

もちろんアタシは規制反対派だ。どんな理由があろうとも「最近

の若者は「なんて理由をつけて、「子供のために」と子供を出汁に使う大人の汚い根性が許せないからだ。もつとまともな理由だったらある程度は許容するとおもうけど、自分たちを信じて疑わない頭でつかちなひとたちが、意見を曲げるのはきつとない。

それはいい。日本の将来を憂いているわけではないのだから。

ああ、少女が惨殺されてしまった……………。

檻の中の少女が噉り泣いている……………。

それから、鬼の少女は月に恋人の姿を思い描いて死んでしまった。

感想。とりあえず、あなたは褒めては貰えないと思うよ？

他の話を見ると、まるで何事もなかったかのようにみんな生きている。こういうこと？ しかもとても仲がいい。刃物でお腹を刺されてしまった少年がコスプレをされたり罌の餌食にされてたりと女の子の玩具にされているのが印象的だった。

この水鉄砲で戦ったりするシーンも名シーンらしい。もちろん、姉とのすけの意見だから、本当にそう評価されているのかはわからなかった。

「今度はじめっから一緒に観ようよ」

「え、遠慮しとく」

のすけの誘いをアタシはやんわりと断った。なぜなら、ちよつとばかり怖いからもっと別のアニメが見たいと説明した。それからのすけは「むむむ」とうなった。きっと、ラストが感動系だから一緒に感動を分かち合いたかったのかもしれない。ごめん、そこに行くまでにアタシが怖い夢を見そうだから嫌なの。

女のほうが男よりグロ耐性あるはずなのに、なんでこう、駄目なんだろう。友達はみんなホラー映画とか余裕で見るのに、アタシは駄目なんだ。幽霊系は余裕なんだけど、血肉を見るのはどうも抵抗

があるのだ。

「次は何にしようか？」

「クレしんにするか？」

「おっ、悪くないね。でも、それはもうちょいあとにしよう。長くなるから」

「そうだな。じゃあ、クラナドにするか？」

「悪くないねえ。あ、マギ力ある？」

「あるぞ。それならドリル観ないか？ アニメ初心者のしずくにも優しいとおもうぞ」

「ナイスなチョイスだのすけくん。褒めて使わす」

「へへ」

三つ指立ててお辞儀するのすけの姿は、なんだかおもしろかった。そして、始まったアニメは、なんだかパツとしない穴掘りが大得意な少年と、熱血な少年。そしてライフルを持った少女三人の冒険の物語が始まったのだけれど……………

「……これが、熱血」

な、なんだろう。胸の奥が熱くなってくる。

それから一風変わったロボットを敵から奪いとり、その後に小型ロボと合体を果たしてしまった。

『本当にスペシャルかも』

うん。

スペシャルだとおもう。

「やべ、こんな時間か」

「のすけの家の門限っていつまでなの？」

「ない。だけどオールナイトで誰かの家にいたことは一度もない」

「へえ。そうなんだ」

アタシがうなずくと、のすけはしばしアタシと姉を見比べて手を打った。

「よし！ オールナイトしよう！」

「はい！？」

「ええ！？」

アタシと姉が顔を見合わせる。

今日、のすけは制服姿で我が家にやってきた。彼が持っているのはDVDが腹いっぱい詰まったバックと学生カバンである。アタシの家でオールナイトをしても、明日はそのまま学校に行けるとおもうけど……。

オールナイトはちよつとキツイかな。

「よし！ じゃあ次の話だな！」

「え？」

強引に話を進めるのすけの思惑が、アタシにはわからなかった。たぶん。純粹にノリでやっているのだとおもうけど……。のすけは表情があまり変化しない割にはずいぶんと積極的らしい。

「う、うん。大丈夫なの？」

「モチのロンロン。一度、女の子の家でオールナイトやってみたかったんだよねー。他の友達が『俺は彼女とオールナイトしたんだぜ！ リア充ってヤツだな！』とか言ってたから悔しくてさ」

それ、絶対に意味が違うから。のすけがおもっているようなことしていないからそのひと。絶対に大人の階段のぼってるよ。

つつこんでもいいけど、そしたらきつと余計に悔しがるだろうからそつとしてあげよう。

「じゃあ、ギガアアア！ ドリルツブウレイカアアア！」

「天を突くドリルだアア！」

ノリノリな姉と彼氏（候補）が同時にDVDを取り出して、新しいDVDを入れた。動きからして、これもネタなんだろう。アタシはさっぱりわからなかったけど、ふたりが楽しそうだったのでよしとした。

結局、アタシたちは朝の七時までアニメを観賞していた。とても目が疲れたけど、たまにはこんな夜も悪くない、かもしれない。

グロッキーになっっているアタシと徹夜明けテンションになっている姉とのすけは何かを言っでは笑っていた。きっと今ならエンピツを転がしただけで笑ってしまうに違いない。

「久々だよオールナイト！ サンキューのすけ！」

「俺も久々。でも女の子とオールナイトするの初めてだからメッチャ嬉しい」

「そうかいそうかいわたしもだよ！ しずくは！？」

「そーそしずくは！？」

「えー？ あ、アタシ！？」

唐突に話題を振られて、アタシは返答に困った。悪くはなかったけど、疲れたからなんて言えいいのかわからなかった。

えーと、えーと。

ええい破れかぶれ！ 初めて最終回まで見たドリルのアニメのマネをした！

「ぶ、ブレイカー！」

「「おおお！ ギガドリル！」」

よくわかんないけど、受けたらしい。ほっ。滑らなくてよかった。きつと徹夜明けテンションの成せる技だ。

結局、数作のアニメを（途中まで）見たのだけど、ドリルの熱血が一番印象的だった。御都合主義と言われるタイプかもしれないけど、何か心に響くものがあつたのだ。

それからアタシ達は、肩を並べて学校へ向かった。学校では、友達に「スゲー顔！」と笑われてしまった。

先生からは「保健室に行くか？」と聞かれてしまったし、みんなが優しい目でもアタシを見る一日になっていた。

睡眠不足の理由が「アニメをオールナイトで観賞していました」なんて口が裂けても言えない。

とほほのほ。

言い訳コミュニケーション。滑りすぎのすけ

アタシの姉はニートだ。

今しがた今日も頑張るか。と口にしたら二階より「嫌だ！」という拒絶の声がした。ここ最近は働く以外にも「頑張る」という言葉にまで反応するようになってしまった超情けない姉である。

自室にて目薬をさす。くうう、この壮快感が堪らない！ 目に爽やかな風が吹いたみたいに気持ちいい瞬間だ。

両親は旅行中であと三日は帰ってこない。その間に色々好き勝手やろうとおもっているアタシだった。姉は……………いつも好き勝手であるけれど。絶対に真人間に戻してやると心に硬く誓っている。「さあて！ 今日よりはりきってこう！」

『はりきるもんか！』

「なんで聞こえてんの！？ てか『働く』に関係しそうなポジティブな単語を否定するのやめてよ！」

『ふんだ！ 働いて社会に貢献して何になるってのさ！ お子様な政治家に税金徴収されて高い酒やキャバ代に消えるだけじゃん！』

「バイトすらしてない癖に何言ってるの！？ 社会貢献してるお父さんのおかげで生活してるのに！」

『ネットでバイトしてるもん！』

「どうせネットゲームのシステムでしょ！」

沈黙。

どうやらのを射ていたようだった。

『り、リアルマネーだって稼いでるもん！ ウェブマネーだってあるもん！』

「どうせ全部をマンガとかライトノベルとか、電子書籍に使ってるんでしょ？」

『な、なんでそれを！？』

「アタシだってネットの履歴くらい見れるんだからね」

実は友人に教わっていたりするけど。

『汚いぞしく！ お姉ちゃん泣いちゃうんだから！』

「はいはい。それで、どうするの？」

『何が？ なんかつたつけ？』

立ち直り早ッ。

切り替わりの早さにすこし驚きつつも、アタシは言った。

「忘れちゃった？ のすけが今日も来るって言ってたじゃない」

『ああ、ああ、橘ののすけが来るか』

「もつとわかりやすく言つてよ」

たぶん。橘家ののすけが来る。と言っているんだとおもっけど、さっぱりだ。

「今日は何をするの？」

『みんなでゲームしようって話になってるけど、しくも一緒にできるゲームを探すってさ。ほら、しくってゲームあんまりしないじゃない？』

姉は最後だけ、第三者に話しかけるように言った。きっと【801】本を読みながら仰向けになっているだろう姉のすがたを想像して、すこしだけゲンナリとした。

「うん。アタシはゲームしないよ。でもみんなで出来るゲームって言つてたよね？」

『うん。たぶんアレでしょ。Wiiとか64とかパーティゲームじゃないかな』

果たしてのすけがそんなにまともなモノを持ってくるだろうか？
きっと大変なモノをやるに違いない。

チャイムが鳴ったので降りる。ドアを開けるとのすけがよつと手をあげた。やっぱり異常に膨らんだバックを数個たずさえている。どんだけ娯楽が好きなんだと呆れるしかない。

「先にのぼってるから、ちょっと待ってて」

「わかった」

「あ、でもちよつと経ったらあがってきてね」

「ん？ わかった」

相変わらず、パツとしない顔をしながらのすけは答えた。

「さてと、お姉ちゃんはっと」

階段をのぼって姉の部屋をノックする。そして入った。きっと碌でもない本を読んでいるのだろうと予想していたのだけど――
予想以上にヤバかった。

薄いA4の本を持ってベッドで仰向けになって姉は読書をしていた。昨今のオタクたちは自分たちの縄張りをひろげ、知識をひけらかしているのでアタシにもわかる。あれは同人誌と呼ばれる代物だ！表紙は見るからにヤバい。縛られた女の子を複数の男がいやらしく見下ろすというものだった。激ヤバい。

「このサークル最高だよねー、ネット通販で手に入るなんていいご時世だよ」

「かぁ！？ 何してんのお姉ちゃん！ のすけが来たんだよ！？」

「ふーん」

「ふーんじゃないよまったく！ 今すぐ隠して！ ってなんでこんなに散らばってんの！？」

床や机の上に同人誌の山、そして大切そうに並べてある。アタシからすれば散らかしているようにしか見えないが。

「ダメだよお姉ちゃん！ これはダメ！ のすけが来るから！」

「やめてよそれを踏むな！ ああ！ 限定のコピ本があ！」

足の裏に安っぽい紙の感触がした。姉が襲いかかってきた。何事！？

「わたしの宝物を足蹴にするなんて！」

「ちよっ！ 乗らないで！」

押し倒されて後頭部を同人誌の山にぶつける。痛くはなかったけど姉の大胆な行動に吃驚して思考が鈍くなった。

顔を引っ張られる。痛いわけじゃないけど姉の手が湿っていてちよつと不快だ。

「しずくうう！ この狼藉どうしてくれようか！」

ドアがひらいた。

やや俯き加減で片手にポケットを突っこみながら、のすけが入室。
「ういーっす。わわわ忘れ物——うおわ!？」

変な体勢で固まるのすけ。

姉に乗られて顔を見つめられているアタシ。のすけをアホみたいな顔をで見ている姉のすがた。

「失礼した」

のすけは変な体勢をやめると乱れた制服。曲がったタイを元に戻すと顔を歪めた。まるで知ってはならないものを見たみたいに。

「ごゆっくり!」

「待ちなさい!」

反射的に姉を跳ねのけ、のすけの足をつかむ。

「のおわあ!？」

壁に頭部をぶつけて悶絶するのすけ。へえ、のすけもこんなにリアクションするんだ。

ちよつと新鮮な姉の彼氏（候補）のリアクションを姉とともに堪能してから、姉の部屋へと運んだ。

「いちち、なんでこんなに同人誌があるんだ？」

痛みより、アタシたちのしていた行動を知るよりもさきに、同人誌の理由が知りたいとは。

「いやゝちよつとサークル。。。を手に入れたからつい」

「おっ、手に入れたのか。俺は同人誌の収集はさっぱりだからなあ」

「なに普通に会話してんの!？」

アタシの努力はまったくの無駄だったってこと？ 姉が同人誌読んでますって恥を晒さないように片付けようとしたのに、のすけは

同人誌にも興味がありましたってオチ？ 色々と納得がいかない。

「さて、同人誌はしまうからちよつと待ってて」

姉はそんなことを言って、手際よく同人誌を並べてベッドの脇に積んでしまった。早い。なんでこんなに早く掃除ができるのにゴミ箱は汚いままで変な所にゴミが溜まっているんだろっか？ アタシには姉の感覚がわからなかった。

「んゝ何をする？」

のすけはバツクから様々なモノをとりだした。

ライトノベル。マンガ。ゲームソフト。エッチなゲーム……………

ええ！？

「はいちずるさん。これ約束のモノ」

「弾丸執事！ 待ってました！ ひゃほお！」

凜々しい男が歪なりボルバー（なのだろうっか？ 下部に禍々しい剣を装着している）を構えているゲームを借りてご満悦の姉。なんで男女の間でエロゲの貸し借りしてんのよ！ 色々とおかしい、てかのすけまだ十八歳じゃない！

「何よしずくうその顔は。いまだき女がエロゲやらないってかんがえはカビが生えてるよ」

「俺も男だからエロに興味あるぞ。年齢の規則なんて守る気ねーし」

「ダメだよそれは！ どうやって購入したの！？」

「先輩に買ってきてもらった」

「お、ベターな買いモノだね。ネットで購入すればいいのに」

「いやあ、近所に売ってたから、つい」

穢れた姉と色々な意味で汚いのすけだった。

でもまあ、これが現実か。コンビニで中学生がエッチな本買うつて案外日常的な光景だ。アタシも見たことがある。女のひとがエッチな本を買ったのを見たことはないけれど。もちろん女のひとがエロゲを持って喜ぶすがたも見たことはない。

頬擦りでもしそうな勢いでエロゲを持っている姉のすがたは、気持ちが悪……………。

「二次元に影響されすぎないようにね」

「されるわけねーじゃん。昼メロとか映画のほうがよっぽど危険だよ」

「アニメに影響されるって言ってもさー。なんでカッコいいシーンじゃなくて残虐なことか無駄にエロいシーンばっか持ち上げるわけ？ アニメの本質を見なさい！ 萌えアニメ以外に名作はいっぱいあるんだから！」

「偉いひとにはわからんです！」

「二次元をつくるのは老人ではない！」

言っていることはわかる。

その一部だけを強調してあたかも世の中にはこんなものが蔓延しているんだと保護者に提示する姿勢に納得がいかない！ そう言っているんだ。けれど。

「未成年者がエッチなゲームやる理由にしちゃいけないでしょそれ！」

「なんのことやら？ これは、ちずるさんに貸すために購入したモノであつて。もちろん貸せるモノかどうか味見はしたけど」

「絶対に知り合う前から持ってたでしょ！ まだエッチなゲームなんてしちゃダメだよ！」

「駄目だ待てない！ 俺は、俺は！ 俺はエロゲをやる！」

断言された。もういいや。

なんか、この会話することが不毛に感じてきた。やりたい人は自己責任でやればいいだろう。

「まったく。こーいうゲームやってるひとよりもスポーツ系のヤツのほうが残酷な事件を起こしたり凌辱事件を起こしたりしてるのに、酷いなあ」

「いや、それ今の話と関係ないよ？ 自分を正当化しようとして完全に滑ってるからね。のすけ」

テンションがあがったからか、それとも自分の罪を追及されたからか、のすけの言動がちょっとまとまっていなかった。アタシの言

動もまとまっていなかったかもしれない。コミュニケーションって難しい。

白熱議論はくだらなくって

あの『うおわ!?!』なりアクションが終了してから三十分ほどが経過した。

のすけの頭(の痛み)は大分落ち着いたようで、いまでは何事もなかったかのように平然としていた。

そういえば。

アタシはちよつと気になることがあつたのを思い出した。

のすけが部屋に入ってきた言つた言葉だ。たしか、忘れ物とか言っていた。

「ねえ、のすけ。あのとき忘れ物してないのに、なんで忘れ物なんて言つてたの?」

問うと片手を横に振られた。ノーを意味しているらしかった。

「ああ、あれな。ネタだよ。ハルヒだ。知らないか?」

のすけはアニメ版の真似だと教えてくれた。

ハルヒか。書店で大々的に宣伝されているために聞いたことはあるけれど、原作もアニメも見ることがない。

そう伝えると、のすけは「そっか」とうなずいた。のすけの嬉しいところはアタシがネタや原作を知らなくても変なことを言っていないことだ。たまにいるのよ、え? 知らないの? ぷつ。みたいなことを言ってくるひとが。もちろん極一部のひとだけど、言われる側は溜まったものじゃない。

「俺の予測では俺が『うおわ!?!』と言つた直後に、ちずるさんが『谷口!』って叫んでくれると思つたんだ。まさか実際に大変な事

態になつてると思わなかったから、そのままネタを続行して逃げる算段を立てたんだ。阻止されたけど」

「逃げないだよ。アタシも姉も大したことしてなかったのよ。ただの姉妹ゲンカみたいなもんだから」

「そうだよー。しずくがわたしの限定コピー本を踏んだんだから！」

まだ怒っていたらしい。いいじゃない、それくらいのこと。

「部屋を散らかしたのは認めるけど、わたしの宝物を踏むのは酷いよ！ 限定なんだよ限定品！」

のすけは腕を組み、唸る。

そしてアタシを見ながら告げるのだった。

「そいつぁ不味い。しずくが悪いかもな」

「アタシが悪いの!？」

「限定品なら、仕方がないんだ」

酷い。あんな薄っぺらいコピー用紙をホッチキスでとめたみたいなのはんのどが大切なんだというのか。表紙を見る限りでは内容は健全みたいだけど、ちいさな男の子同士が手を繋いでにつこりと笑っている。もしかボーイズラブではなからうか。さっきエロいと言っていたし、中身は表紙とは別物の可能性も否定できない。

などと、アホな会話をしていたら、まずはアニメ観賞会になつてしまった。

二日連続でオールナイトは勘弁してほしいと釘を打っておいたら、流石にのすけも二日連続ではしないそうだ。姉も今日は眠たいとのこと。いや、姉はいつも寝てばかりの気がする。

相変わらずホームシアターで大きな画面。大きな音で聞いているのだけ。

いきなり主人公が木刀で殺されそうになったり、いきなりお腹を蹴られたり。なんだか観ていると哀れだった。これはツンデレというやつじゃなくてバイオレンスだと思う。しかも前触れもなく頬を赤くして惚れてしまうとは、こういうふうに惚れやすい女の子が人氣でるのかもしれない。

ん？

近くののすけが、口をちいさくひらいていた。耳を澄ますと……。

「転向した先は全員が女……男は一人……」

のすけが二度ほどそうつぶやいた。

突如としてアタシの顔を睨むように見つめると、あんまり表情が変わらないのすけだけど、たまにイキナリ変化するのでビクリしてしまう。

「転校先は全員女！ 男は主人公一人！ こんなシチュがあってもまだ『ラノベって女が読むモノでしょ？ 男が読むなんてモイキ』などと言うのか！ あそこは男の聖域！ マン・サンクチュアリだ！ 女人禁制だなんて口が裂けても言わないが！ いきなり我が者面するっていうのはどうよ！？ なんて普通に楽しもうとしないんだ！ なんてファン同士の間で争いが起きるんだ！ ちくしょう！ 意味がわからないほどに感情的になっていた。ここまできると恐い。彼はライトノベルを購入するにあたり何かしらの心的外傷を負ってしまったのかもしれない。アタシはそう思うほかになかった。後に聞いたことなのだけど、行きつけの本屋で「うわ、何十分も男がラノベコーナーに立ってるよ！ ぷっ」「キモっ！ モイキ！」と女子中学生ズに言われたらしい。それは、傷つくかもしれない。というかいまの話って。

「その話まだ引きずってたの！？ モイキなんて死語だから！」

最初にのすけと話したときに、彼が言っていたことだ。ライトノベルとは元々は男が読むものだった。という彼の持論というか、彼の世界と言うか、とにかくそんな漠然とした哲学的なものである。

「ライトノベルのコーナーにいますと女が変な目で見てきて納得がいかねえんだよ！ てめえらの読んでるラノベ作家って大概は男じゃねえか！ 男が男のために男の夢を紡ぐ活字の海で形成されたロマン！ それがライトノベルなんだよオオ！ 女の子が主人公のラノベだって超面白いけどなあ！ 大好きだよ『私と男子と思春期妄想

の彼女たち』なんか特しょっぱなから飛ばしてるし！ もう、最高！」

何を言っているんだろう？ 本当にわからない。

「いよっ！ よく言っただのすけ！ でも女だって男の夢にあやかりたいんだぞ！ 熱血マンガとか少年マンガとか、戦闘シーンを楽しんだり男のキャラがカッコいい！ ってテンションアップしたっていいじゃないの！」

「俺だって少女漫画読んで女の夢にあやかってるさ！ 面白いからな！ ぼろりと来るシーンだっていっぱいあるんだもん」

……全然、ついていけない。

のすけはライトノベルに魂を燃やしているという感じだった。燃やして燃やして燃やしまくってる。そこにはいつさいの妥協がなく、ライトノベルに情熱を捧げているみたいだった。アタシの理解はおよばない。よくわかんないけど、何かあったのだということにしておこう。考えてもわかるはずないし。

姉はのすけに言葉を投げかけた後に、せんべいを齧り言った。

「がりぼり、なんでこう、天候初日ってお譲さまキャラがプライドの安売りをして勝負を挑んで来るのかねえ。勝つてもえる者は何もなしでしょ。せいぜい相手をバカにできるくらいかな？」

「あ、それ俺も気になる。でもお譲様が難癖つけて勝負を挑むシチュエーションは王道だよな」

「だねえ。ドリルロールな髪型だとおよし」

「いいな。オホホって笑うとまさに二次元キャラって雰囲気になるから好きだ。リアリティ求めるのもいいけどさ、やっぱり現実味がないキャラがいっぱいいいと思うんだ。その方が別の世界って気がするしな」

切り替え早ッ！

さっきまでは興奮状態だったのすけは消え失せ、姉と共にアニメを観賞しているのすけがいた。

「ということでもラノベ読んでみろよ。意外とハマるぞ。別

にこれの原作を読む必要はないけど、面白そうなのがあつたら手にとるんだ」

「ねえのすけ、ということでは必要なかったと思うんだけど」

「初心者なら【永遠のフローズンチョコレート】とかいいか？ 小説家さんがライトノベルに参戦したものだ」

噂で聞いたことがある。

ライトノベルを読むひとは、小説家とラノベ作家と呼び方を変えるのだという。そんな必要があるのかはわからないけど、何か違いがあるのかもしれない。

え？

というかアタシがライトノベルを読む方向に話が進んでいる。

「落ち着くんだのすけ。あれは最初の行からいたいたいけな少女がハンマーで男性を撲殺するところから始まっちゃうでしょ？ しずくはグロイの苦手だもん。ほら、楽しげに殺してたじゃない。ひぐうも駄目なはずくがあんなの受けつけるはずないよ。お父さんを殺した包丁くだりの件が出てきたら泣いちゃうかも」

初心者に何を読ませようとしていたのよ、のすけ。

アタシがそんな目で見つめていると、視線を合わされた。ガラス玉みたいな無機質な瞳が、じつとこちらを見ている。アタシはまるで自分が悪いことをしたような気持ちになり、目を逸らしてしまつた。なんで瞬きろくにせずに、ずーっとこっちを見つめるわけ？ ちよつと怖い。

「なら【世界平和は一家団欒のあとに】にするか？ 主人公の家族の設定が壮大で、一人称だし読みやすいのではないか？ 主人公が完全に今風だぞ。面倒くさがり屋だし、変に自信たっぷりなのに、実力はそんなでもないってのがポイントだと思う」

「のすけ。なんでアタシと眼を合わせながら言うのよ。お姉ちゃんを見ながら言つてほしいんだけど？」

「ここはあえて【ベン・トー】を推薦したいかな。あのバカバカしさと同時に存在する奇抜なシリラス感にスピーディーな展開。散り

ばめられたネタの数々とんでもギャグの数々。まさにライトノベルの世界を堪能できるでしょう。SD文庫はそろそろもっと人気出てもいいとおもうしね」

「いいな。でも、俺は【猫の地球儀】をあげよう。登場キャラが猫とロボットのみにというファンシーな世界なのに、根っこからSFという逸品だ」

「ねえのすけ、だからなんでアタシを見ながら言うの？ お姉ちゃんもすこしはつつこんでほしいんだけど？」

睨まれっぱなしである（本人にそのつもりはないらしいのだけど）。視線を逸らしたら襲われそうな気が……………。

「ちよつと！ SFは初心者には早くない？ 面白いし猫にゃん可愛いと思うけど、ラストの方であの雌の猫にゃんが……………」

「それもそうだな。なら【スイート・ホーム・スイート】なんかどうだ？ 一巻からハリポタに喧嘩を売るような発言、自重しないジヤイアニズムなネタ。主人公が辺鄙な国で怪物たちの若様になるつてところもラノベらしいぞ。ラストの方では中々に熱くなる展開に全四巻とお手頃な巻数だ」

「ふーむ。それなら【フルメタル・パニック】とかいいんじゃないの？ 軍曹さんとヒロインの夫婦漫才に加え三角関係、シリアスシーンではヒロインのために命を張れる軍曹さんの恰好よさに惚れてもらおうじゃないの」

「おお。素晴らし——いや、待った。フルメタは面白いが、巻数が長くて軍事ネタがたまに出るから女の子が初めて読むライトノベルと条件を限定してしまうと、ちよつと難易度が高いかもしれない。ここは【ゼロの使い魔】や【スレイヤーズ】みたいな魔法が登場するファンタジー作品にするべきかもしれないぞ。あと【フォーチュン・クエスト】は…………長すぎるから外すぞ」

うん、それがいい。アタシは心でのすけの意見に同意した。長すぎないファンタジーがいいよ。

軍事兵器は物々しいけど、魔法って聞くとバトルがあつたとして

も幾分か身構える必要がなくなる。

それから姉とのすけはずっとライトノベルのタイトルや内容について語り合いはじめた。未だに視線はアタシに向けられたままだけど。ふたりとも声だけを合わせて眼を合わせようとしないので不可思議だった。

話し合っている内容はこうだ。

メディアミックスなネタが多いとアタシにはわからないから面白さが伝わらない。だからオリジナリティがあり、読み終わり印象に残るようなライトノベルを候補に入れるべきだ。なんて言いはじめの始末だった。

「だから！ 【這い寄れニヤル子さん】はメディアネタが多すぎるよ！ 萌えクトウルフと銘打たれて、クトウルフ関係については基本的に簡略系にされているから、だれにでも楽しめるようにできているのは認めるけどさ、ガンダムネタと古いネタが多すぎるから却下だよ！ のすけは何を考えているのよ！」

「でもちずるさんだって【かのこん】を進めようとしたじゃないか！ アレはエロすぎるっていうか、イラストレーター繋がりで！ それだったら【生徒会の一存】いや【いつか天魔の黒ウサギ】の方がいいじゃんか！ ちよつと読み難いかもしれないけどシナリオは、まあグッドだ。イラストが素敵だし」

ちよつと自信なさげなのすけだった。何か、わけありなのかもしれない。

「さつきしずくにファンタジー系を読ませるって言ったからファンタジア文庫責めに來たのね！ 甘いわ！」

「何がいけないっていうんだ！」

「のすけがいまあげた作品は、どっちも完結していないの！ しかも生徒会の方はメディアミックスネタがあるし、女子高生初心者には関門になるかもしれない。挙句にどっちも学園モノでしょ！」

姉にビシッと指をさされ、アタシを見ながら両手を頭に当てるのすけだった。ねえ、いつまでアタシを見つめる気？ 視線があつた

ら離せないってやつなのかもしれない。

「ねえ、アタシを見つめないで」

「ファンタジーを読ませると口にした本人が学園モノを進めるなんてお笑いもいいとこだよ」

「お、俺としたことが！ いや、でも——どちらもアニメがある！ 文章だけじゃなくて視覚からも入門できる！ 初心者にも優しいじゃないか！」

「アタシの言葉を聞いてよ！ それといまのは屁理屈でしょ！」

「あのアニメを！？ あのアニメを見せるっていうのかのすけ！ わかってるだろう、天魔はパンチラ枠に入門したということを！ 知らないなんて言わせない！」

「く、くううう！」

「ちよつと！ こつちを見ないでつてば！」

叫んでも、聞こえちゃいなかった。

「ぐう。わたしはね、完結しているファンタジーがいいと思うのよ。例えば【スクラップド・プリンセス】とか」

「むむ。それなら【まじしやんず・あかでみい】はどうだ！ 現代を舞台にしているのに魔法学園に通う二重生活！ ラスト方面では主人公が過去を乗り越える瞬間がたまらない」

「グハツ！ バカもん！ それもネタがちよろちよろ出てくるよ！

ここは【オルキヌス稲朽ミツルの調停生活】を押すね！ 人外と人間のアホなボケとツツコミに戦闘をしないバトル！ 巧みな話術を読んでもらおうよ！ ラストがジャンプの『俺たちの冒険はまだ始まったばかりだ！』的な終わり方で、打ち切り臭が半端ないことを抜かせば面白いよ！」

もう、何が何やら。

ライトノベルの話をしているのはわかる。わからないひとからすれば、いまのは呪文以外の何物でもない。御経といい換えてもいいくらいだ。その手の知識がゼロに等しいから、姉とのすけが何を言っているのかわからないんだもん。

姉が反撃に出た。のすけがたじたじになっている。

十分近くの時間が経過した。

現在は『一人称』のファンタジー系を読ませるということとで話がまとまってきたみたいだ。ようやく原点に戻ってきた。

のすけはアタシからようやく眼を離してから、姉の方を向いた。
「むうううう、一人称ならば読みやすいけどアレは完全に男の一人称と愚痴が続くじゃないか！ どうせなら女の子の一人称でファンタジーにしよう！」

偉く条件が限定されてきたようだった。

姉はすぐさま声をあげる。

「あるというのか！ そんなラノベが！」

「ありますとも！ SD文庫の『世界征服物語』だ。とあることを切欠に異世界へ行った少女がモンスターを従えて日々を過ごす！

アレは主人公の女の子が一人称で話を進めていくからしずくも世界観に入りこみやすいかもしれない。面倒くさい専門用語も特にないし、ファンタジーで、こむずかしい魔法理論も全然使わない。全体的に可愛らしい感じがしてグッドなはずだ！ ラストの展開もいい感じ」

熱弁に感服したのか、姉は拍手。意味不明。

「おおつ、それはいい。主人公がハルバード振りまわしたりするお転婆なところもしずくと似てるかもしれないし」

「お姉ちゃん。どういう意味？」

「そそそ、そそれに、ギャグありシリアスあり、バトルありでマスコットキャラまでいるからね。難しい話も特にないし、男女ともに楽しめる一品でしょう」

きよどりながらも話を逸らされた。

ところでハルバードって何？

「だな。それにしよう。はい、しずく」

のすけが黄色い表紙に女の子が書かれて、デフォルメされたモンスターが散りばめられたライトノベルを何冊か渡してきた。ふーん、

物々しいタイトルの割にはコミカルな表紙みたい。可愛いかも。

……………あれ？

「って！ 持ち歩いてたの！？」

「いつも何冊か持ち歩いてるからな。今日はたまたまこれも持ち歩いてた。持ってくる手間が省けてラッキーだ」

道理でバッグが異様にふくれているわけだ。というか重くないのかな？

アタシにライトノベルを渡した後も、姉とのすけはプチ議論を延々と繰り返していた。ヒートアップしている。ボルテージがあがりっぱなしだ。

こんなに生き生きとした姉は久しぶり。すこしだけ、嬉しかった。のすけの方は、口だけが別の生物みたいに開閉している。正直な話、すこしだけ、気持ち悪かった。

「のすけ。前から思ってたんだけど」

呼ばれた途端にフクロウが横を向いたみたいに、のすけの首が動いていた。その両眼は姉を睨むように見つめていた。

「どうしたのちずるさん」

「睨まないでよお」

姉は困ったように唇を尖らせる。それに対し、のすけは目の内側に疑問符を浮かべていた。

「話すときは、相手の目を見るもんだろ？」

「見すぎだよ。恐いのよっ」

「うおうっ」

チョップされるのすけ。なぜか嬉しそう。

姉の的確なつつこみ——あれ？

いまちよつと凄いことが起こった。

姉が、自らの手で他人に触れたのだ。

それに気づいたのだらう、姉は自分のチョップを振りおろした手を見つめ、きょとんとしていた。

ネットでも駄目な姉

姉がのすけにチョップをしてからのことである。

ゲームでいっしょに遊ぶことになったのだけれど……………。

「ネットゲーム？」

「そー。しくも一緒にやろう」

アタシの問いに親指を立てるのすけだけれど、アタシはちょっと複雑だった。エンディングがないゲームはミニゲームくらいでいいとおもっているからだ。

のすけが持ってきたゲーム。それはソフトではなかった。

パソコンをつかって遊ぶオンラインゲームである。ちなみにアタシもノートパソコンくらい持っている。あんまり使わないけど、無いよりはある方がいいとおもって購入したのだ。

のすけが既にダウンロードしていたデータをアタシのパソコンに入れて遊ぶのだけれど、要領にまだまだ余裕があった。元々、アタシはパソコンに大してデータを入れていない。だから、容量は三割ほどしか使っていなかったのだ。

さて、のすけのパソコンは、データの容量が九割半ほど使っているのローカルディスクが真っ赤だった。どうやら彼はハードディスクをあまり持っていないらしい。

インストールしたゲームのアカウントをつくれと言われたのだけれど、ユーザーネームとIDはどうしよう。パスワードもかんがえなければならぬのだ。手順がちよっとばかり面倒だった。

手順をすべてふまえて、ゲームの世界へゴーしようとして腕がとまってしまった。

理由はなんだかテンションが高いふたりのせいだ。

「よっしゃ金ゲット！ もつと落とせ！」

「調子がいいねのすけ君！ 唯一いいクマは死んだクマだけだ！」
どうしよう。

ネットゲームって全身で楽しむものかな？ もんのすごく楽しそうなのは事実なんだけど、敵を倒したりアイテムをゲットしたりする度に全身を震わせるように喜んでいるのだ。あれは、高度なジェスチャーなのだろうか？

これはちよつとした偏見なのだけど。

アタシはネットゲームってのはこう、ひとり寂しく画面を見つめながらやるモノだとおもっていたのだ。カーテンも開けずに猫背になって画面に齧りつくようにして、無言無心で続けて行くものなのだ。加えてネットゲームには終わりが無い。だから、何が面白いんだろう？ 終わらないゲームをずーっとやって楽しいのかな？ という感じに偏見を抱いていたのだ。

しかし、このふたりを見てみるとそんなかんがえは吹っ飛んだ。

「吹っ飛ばせ！」

「ヒヤッハー！ この威力ダイナマイト！」

同時に、やる気も失せる。

こんなハイテンションに入る隙間はあるのだろうか？ と。もしかすると、アタシが同類になってしまふ可能性すらありそうだった。アタシ、ちよつと流され易いから。

「しずくう、固まっちゃってどうしたの？」

興奮しているからか、やや顔が赤い姉である。その隣では動物を剣で斬り殺しているのすけがいた。斬り捨てられた動物は回転しながら吹っ飛び、横たわってしまった。ああ、なんて惨いことを。

「課金なしでもこれくらいできるってどこを見せてやるぜ！ 行くぜダンジョン！ バグベア狩りだああ！」

「いよっ！ 待ってたよ！」

色々ダメだこのふたり。

とりあえずバグベアというモンスターを狩りに行くらしい。

話によればクマの何十倍も強いらしい。このゲームは自分よりも弱い敵を倒しても経験値がまったく手に入らないそうなのだ。それならばなぜ道中にいたクマをわざわざ斬り殺したのだろう？ 無意味な殺生もゲームのだいご味なのかもしれない。

ああ、キツネの悲鳴が耳に飛び込んできた。

「ハッハー！ 塵も積もれば山になる！ わたしに金を落とせ！」

「なんでお姉ちゃんはその元気をもつと別の所で使えないの！？」

「え？ チャンネル変える？」

「いや、そういう意味で言ったんじゃないから」

チャンネルというモノがあつて、ログインしているひとが多いところとそうでないところなど色々あるらしい。今日初めてネットゲームに触れるアタシにはわからないことだらけだ。特にふたりのテンションがわからない。

のすけは何やらウマ（角が生えてる白馬）を召喚して姉の小さな女の子キャラクターに乗せた。

「ハイヤア！ シヤチ丸！」

「これ、乙姫様の試練！」

ウマにシヤチ丸つてのすけ、それでいいのかな？ もっとこう、可愛い名前をつけてあげればいいのになあ。てか、お姉ちゃんは何を言ってるの？ この西洋ファンタジーな世界観に乙姫いるの？ あれジャパンファンタジーじゃないと登場できないよね。

ん？

ダンジョンにて戦っているふたりであるが、歯を食いしばってモンスターを倒している。

「タゲタされたあ！ 助けてのすけ！」

「こっちもタゲタされたあ！」

タゲタとはなんだろうか？

見れば、複数のモンスターにロックオンされてボコボコにされていた。攻撃しようとしたら脇から、あるいは後ろから攻撃されて吹き飛ばされている。ああ、多数の敵にターゲットされて、略して多

ゲタ↓タゲタってことなのね。

そして姉は自分のキャラクターを死んだふりさせるとキャラクターの顔のあたりに文字が出てきた。

『o r z』

現実世界でもダメな姉は。ゲームの世界でもダメダメだった。ダンジョンに入って数分でさじを投げるなんて。

対するのすけはモンスターをすべて蹴散らしてしまった。何度かよくわからない爆発やら雷やらを使っていたけど、ライフは十分の一くらいになっていた。そして姉のライフだけど、五割以上は残っている。なぜ手伝わなかったんだろうか。

『b』

姉のキャラクターがそうつぶやいた。いやいやい、グッジョブ！じゃないから！ 親指立ててないで感謝を言おうよ。

そうおもっていたら、のすけがタイピングをしていた。早！ タイピング早ッ！

瞬く間にのすけのキャラクターが言葉を伝えた。

『小学生でも役に立ってことを見せてあげるよ！』

カツオ！？

ファンタジー世界でカツオ！？

姉のキャラクターが死んだふりをやめて立ち上がる。そしてのすけに回復魔法。のすけが姉に回復魔法してライフが見る見る内にあがつていく。

『行くぞ！ 俺たちの冒険はまだ始まったばかりだ！』

『いままで、ご愛読ありがとうございます！』

『先生の次回作にご期待ください！』

『ちょｗｗおまつｗｗｗｗ』

『打ち切りｗｗ』

『次回作でないフラグｗｗ』

『個人的に好きだったのにｗｗ』

……………。

…… ええと。

キャラも、本人も。

目の前にいるのに。

なぜこんなにも距離がひらいているように見えるのだろうか？

スッゴイ楽しそうな顔をしている。ネットゲームはひとを変えるのかもしれない。果たしてそれがいい方向に変化しているかと問われれば、迷うところだ。

『いざ出陣！ ついて来いのすけ！』

『イエス・マム！』

ふたりの楽しそうな声を聞きながら、アタシのキャラクターは妙に回転するすがたが似合う女神（？）に祝福を受けていた。これから、アタシも冒険の世界に旅立つのかとおもつと、ちよつと憂鬱になった。

まあ、姉がひとりで「えへへ」と笑うことはあったけど、いままでこんなに楽しそうに笑うことはほとんどなかった。これは、いい

傾向なのかもしれないとおもっておくことにした。

あとで、のすけに姉を説得するように頼もうとしていることを思い出しながら、クエストを受けるのだった。ああ、なんだかちょっと面白い。

この日はずーっとインターネットゲームをしていたのだけど、悔しいことに姉がハマった理由がなんとなくわかった気がする。アタシがあそこまでのめり込むことは、あり得ないだろうけどね。

のすけが帰宅してから大凡一時間。

アタシは風呂上がりで、ドライヤーで髪の毛を乾かしたので頭が熱々だった。

「あゝ疲れた」

自室のベッドに倒れ込み、ふと目に映ったモノは黄色い表紙。のすけが貸してくれたやつだった。せつかくだから、世でおこつ。

アタシは借りたライトノベルを読みながら布団の中に潜りこんだ。明日もこんな感じになるんだろうな。と他愛のないことをかんがえてしまった。姉がニートから真人間に戻るにはどうすればいいだろうか？ 本当ののすけとくつつけたらマシになるだろうか？ ええい弱気になるんじゃないぞアタシ！

「絶対に、ニートの姉は要らない！」

数日ぶりにそう宣言して、アタシは布団の中から拳を突き出し天へとむけた。

このあと、アタシの思わぬ方向に話が進み、困惑してしまうのはまた別の話。

「ニートの姉などもう要らんッ！ 明日もいっぱい頑張ろう！」

『頑張るもんか！』

隣の部屋から姉の文句が聞こえた。

「だから何で聞こえるの!? おかしいよお姉ちゃん!」

「わたしはカテジナさんじゃない! 腐るまま腐っていきたいんだ! 頑張るもんか! ハリキルもんか!」

「頑張るのアタシだから放っておいてよ!」

「なーんだ。じゃあグッナイ!」

「う、うん。おやすみなさい」

姉のニートセンサー（働くことに関するポジティブな単語に反応する感覚のこと）は冴えるばかりで衰えることをしらない。

アタシはため息を吐いてから、瞳を閉じた。

明日はのすけに姉を説得するように頼むのだ。もう、姉のだらけライフは終了する。

ささやかな希望は、意外な形で訪れた。

ラクガキと熱きのすけ

ネットゲームを堪能した次の日、アタシはのすけと足を揃えて帰宅しようとしていた。

アタシの友達である浅木は変わり者である。ふた月分のジャンプを溜めて、捨てるときにすべてのマンガに落書きをして捨てるのだ。変なことをする。前にのぞいて見たけど、最早マンガではなくラクガキにされてしまっていた。作者が見たらなんと言うことか。

なぜそんなことをするのか聞いてみたけど、返答はこうである。

「拾った相手が残念そうな顔をしたのを想像すると、たまらないの」
ギヤハハ、と女の子っぽくない下品な笑い声をあげて、彼女はのたまった。どうやら単に悪戯をしている気分らしい。捨てたジャンプを拾うひとなんて、いないだろうに。アタシは浅木が自室でニヤニヤしながらジャンプにマジックインキやボールペンを走らせているすがたを想像して、情けなくなつた。色々とおかしいよ。余談だけど、大抵のキャラクターに『ちょび髭』を生やさせていた。

数時間前に教室で話したことを反復しながら、アタシはのすけの隣を歩いていた。カップルかとふざけて言つた生徒もいたけど、のすけが「いんや。俺はしずくのお姉ちゃんに片思いしてんだ」と真顔で言っていた。何人かが「え？ あの子も引きこもりに？」と首をかしげていたので、アタシはいたたまれなくなつただけど、のすけが

「相手をバカにするのは結構だけど、バカにした相手と同じ歳になったら自分がどれだけご立派になつてゐるかを心配しとけよ」

とガン垂れたので気が楽になった。ありがとうは、言っていない。だって、なんだか恥ずかしいし、借りを作ったような気分になってしまっからだ。むう、あんな顔もできるのかのすけは、いつもは——ライトノベルの話をしなければ——無感動だし変化しても普通のひとと比べればずっと乏しい。でも、愛想笑いをしたりウソの表情を浮かべたりすることはない。彼が笑えば本当に笑っていて、怒れば本当に怒っているということになる。彼は案外、子供っぽいかもしれない。

学校帰りのアタシとのすけは当然だけど、制服姿だ。

「そっぴや、両親はなんで家にいないんだ？」

「いまハワイ旅行に行ってるの」

「なるほど。ウクレレとシャブ（覚せい剤）の国か」

「違うよ！そこは責めてハイビスカスだよ！のすけはハワイになんの偏見を持ってるの！？いや、ハワイには他にどんなものがあるとおもってるの？」

「そうだな。ハワイヤングヤング？」

聞いたこともない単語だった。何そのギャングは？ウクレレ奏でて夕日を肴に歌ったりしてないよね？というかそれは『もの』じゃないよ。団体さんだよ。

ひとしきりツツコミをした後に、アタシは気づいてしまった。

どうしてかのすけが苛立っているということに。

「何かあったののすけ？」

「なんでもない。ただ、学校でマンガを読んだんだ」

勉強しなよ。

休み時間だからって何をしてもいいってわけじゃあないんだからと口にしようとおもったけどやめておいた。言っても変な理屈で誤魔化されそうだったからだ。

「オチが気に入らなかった。とか？」

アタシが推論を言っていると、彼は首を振った。

「……………なんで『ちよび髭』なんだよ」

！？

もしかして捨てられたジャンプ拾ったの！？ あの、浅木が捨てたヤツを拾ったの！？ さっきまで「そんなの拾うひといないでしょ」なんておもってたのに、ここにいたわようどうなってるの！？

そして、浅木の思惑どおりに、のすけは苛立ちを露わにしていた。眉間に小さなしわが出来ているのがその証である。

「なんで『カイゼル髭』じゃないんだよ。マンガなら『カイゼル髭』だろ？ それを『ちよび髭』だと？ マンガに対する冒涔だ」

「……………」

どうやら、のすけは『ラクガキをしたマンガ』に苛立っているのではなく『ラクガキ』そのものに文句を言っているようだった。ええ。色々と言ってあげたかったけど、またテンションアップされても困るから放っておくことにした。

「ねえ、のすけ。最初の話は覚えてるの？」

「一応な。あれだろ？ ちずるさんに働くように説得しろ」

「そうそれ！ 頼むよのすけにかかってるんだから」

「うん。別にいいけど、ちょっとばかり時間がかかるぞ？」

のすけの作戦をアタシは一言も聞いていない。でも、なんだか自信ありげ——だとおもいたいけど無表情なのよね——なので信賴して大丈夫なはずだ。

いよいよ。ニートの姉とおさらば出来る！

アタシはガッツポーズしたけど、現実はそう甘くはなかったと知ることになる。けれど、それは小さな希望ともなり得るものだった。

我が家につき、姉の散らばったゴミをゴミ箱に押しこめながら、のすけは言った。

「ちずるさん。何か目指してるものはある？」

「えゝ目指してるもの？」

キャミソール姿という色々和不味いはずの服装にのすけはスルーしていた。土下座するらも無視できるのすけだ。これくらいで動じることはないのだろうとおもっておくことにした。最悪、二次元でしか元気にならないのかも。などと不吉なおもってしまった。姉はヘッドホンを外して口をひらこうとした。

「たとえば。イラストレーターとか、ラノベ大賞とかさ」

姉は口をあけたまま沈黙した。

ビンゴだったらしい。姉は何食わぬ顔でパソコンと向かい合おうとした。

「そんなわけ——」

「ないよね。受からないし」

なんだろう。姉のからだから負のオーラが発射されている。見ていだけで怒っているかわかるマイナスのエネルギーが北風みたいに吹きだしているのだ。な、なぜ？

「よくいるんだよねゝ。イラストも大して描けなくて、文章も大して書けないのに『俺が次世代に新風を巻き起こしてやるぜ！』って勘違い君が」

「のすけえ！ 言っていいことと悪いことがあるんじゃないかな？」

久しぶりに姉が怒っていた。まるでアイデンティティーを傷つけられたかのような怒りだった。もしかして、本気で目指してるのかな？

「あ、やっぱり目指してるんだ。俺もなの」

「……え？ のすけも？」

のすけのカミングアウトによって一瞬にして鎮火される姉の怒り。実はのすけって相手の怒りを鎮める才能でもあるのかもしれない。いや、今のは姉だから止まったのか。実際にやっていたら顔面にパンチされてもおかしくはなかったとおもうし。

「どっちを目指してるの？」

恥ずかしそうに俯き、呟く姉。

「実は、その……どっちも」

二兎追う者は一兎も得ずって諺を思い出した。

「そうなんだ。俺はラノベのほう」

うん。だろうね。

のすけに関しては予想どころか確信を抱いてたよ。

とりあえず、姉を説得してくれるという話だったはずなのに、何この夢のカミングアウト大会は？ この調子で行くとアタシに矛先が向かうかもしれないとおもったので、アタシは早急に手を打とうと――

「しずくも一緒にやろう」

――したけど間に合わなかったっぽい……………。

「や、やるってなにを？」

「ラノベかイラスト」

……………。

ここはイラストと言うべきだろうけど、アタシは水彩画しか描けないのだ。のすけや姉の言うイラストとはあの、最初に見せてくれたライトノベルの挿絵やアニメのキャラクターチックなものに決まっている。ならば、アタシはそんな絵柄は描くことはできない。ということとは……必然的にライトノベルになるわけで。理由は絵の練習をするよりも文章の練習をする方が

「容易いとおもったら大間違いだ。向上心を失った状態になると、たとえ書きあげても『何これダメダメじゃん』と叩かれることは決まったようなものだ。プロもネットで大々的に叩かれるご時世だぞ。そんなに甘くはない。ついでに、実際問題のところ絵を上手くかけてもインターネットの絵を見て『え？ 私こんなに上手く描けない。こんな人達が応募するなら負けちゃうよ』と尻込みしてしまう方がいるからか、イラストレーターの応募は少ない。ひよっとしたらただ単に本当に絵が描けない人が多い可能性も否定はできないが、詳しくは知らない」

やばい。のすけに軽く火がついた。

「反対にライトノベルは応募数が年々増えている。『文章なら俺にだって!』と意気込む者達が集っているからだとおもう。人数が多くて、一次通過すらも狭き門だ。あ、ちなみに俺は『こんなマンガみたいな内容の文章を書けるなんてスゲエ! 俺も肩を並べたい!』ってのが動機だ。イラストレーターになれないからラノベ書いてみたいってわけじゃない。元からラノベが本命だったりする」

聞いていない動機まで教えてくれた。どうもね。

アタシは優しく目じりを掻いてから聞いてみた。

「で、お姉ちゃんは?」

「わたしは自分でイラスト描いて挿絵にしたい! っておもってるからどっちもやってるよ」

のすけが一瞬で姉に近づいた。速い!

「なるほど。イラスト見せてくださいな!」

「ほい」

パソコンに、パンを啜えた犬を追いかける女子高生がふたり映し出された。何気に上手い。

「なるほど……………マンガチックに描いてますなあ」

「ども」

何かシンパシーを感じたのかニヤツとするふたりであった。なぜだかは知らないけれど相変わらずチャンネルは繋がっているみたいだ。

「それで、文章の方だけれども」

のすけの何か嫌らしい視線が気になった。まるでこれから「女子の下着でも盗みに行くか」とでも言いだしそうな目だった。いや、マジでヤバイよこの目は。姉も同じく「これから風呂でも覗くか」みたいな顔をしていた。いやいや、身内にこんな顔をされると殴りたくなってくる。

「しずく! 何してんの!?!」

これは危なかった。

思わず拳を握り締めていたではないか。殺気を感じた姉がアタシをふりむき、「ノウ！ ノノノノウ！」と止めに入っていた。と
いうか発音が悪ッ。

「肝心の文章は……あんまりよろしくないな。悪くないけど、よろしくない」

のすけは一体何をかंगाえているのか、さっぱりわからないけど様子を見守っておくことにした。どうやら、彼には彼のやり方があるようだからだ。けれど、アタシがライトノベルを書いてみる、というのはちよつと頂けないかな。

「そんなに文章悪い？」

「うん」

割とあっさり言うのすけである。

そしてあっさりとへこたれる姉であつた。駄目だこりゃ。

アタシが自分の頭をぺしつと叩きそうになったときに、のすけは不敵に笑つた。お、のすけの顔が変わつた。何か言うつもりみたいだ。

「文章もさることながら、ストーリーがな」

「そんなに酷い？」

「これは、いわゆる最近流行りの劣化キャラクターじゃないか？別にキャラクターが劣化するのは構わないが、能力までパクっちゃ不味いだろ。ある程度は変えなきゃ」

「能力をパクツた？」アタシはそう聞き返した。「どんなふうに？」

「これは自分の片方の手に触れたら能力を掻き消すっていう能力だな。要するに『無効化能力』のこと」

「なるほど」

聞いたことがあるような気がする。浅木の弟がハマっていたはずだ。白いシスターが出てくるライトノベルらしいけれど、アタシは見たことがない。

「駄目だよ幻想殺しを使っちゃ。責めて脚色した能力にしなきゃ、まんま使つてもどこも採用してくれないよ？」

「だって好きなんだもん。説教タイムも」

「いや、それアニメの方が際立ってるじゃないか。うーむ。仕方ない、俺が少しだけご指南しよう」

「のすけが指南できるの？」

「のすけはうなずくことはしなかった。どうやら、自信はないみたいだ。」

「まゝそれとなくな。こう見えても最終選考手前で落とされたこともあるんだから、多少は大丈夫だろ」

「マジ！？」

驚く姉であるけれど、自慢の仕方がちょっとネガティブだったのが気になった。責めて「もう少しでデビューできそうだったんだ」くらい言えればいいのに。

「それでは、面白いかもしれない初心者講座を始めよう！」

「のすけの顔は浮かないけれど、声だけは元気いっぱいだった。」

ためにならないラノベ講座（前書き）

これは筆者の偏見ばかりなのです。文章を書いたり内容を考えた
りする上で役に立ちません。（「A」；；；

ためにならないラノベ講座

アタシの姉は二ートである。

自称警備員の引きこもりで夢なんか持っているはずがない、とおもっていたのだけれど、どうやらそれは間違いだったみたいだ。

何気にイラストか小説の大賞を目指していたらしいのである。

のすけは二次元に関して相当なまでに懐がひろいからか、気があったのでこのまま恋人同士にさせて姉に『脱二ート』してもらおうとおもっていた。けれど、のすけには「姉を働くように説得してほしい」と頼んでしまったのだ。

流石に、姉をもらってくださいとまでは言えなかった。のすけは、口では片思いいしているとは言っていたけど、表情があんまり変化しないので信じきれない。ごめんよのすけ。

「さあて、先ず、ライトノベルにどんなイメージを持っているかなふたりとも？」

椅子に座ったのすけが質問をした。

アタシはやや悩んでから、答える。

「ジュニア向けの小説？」

「萌え」

姉よ。なんでそう短絡的な答えしか出せないのでしょうか？ おもわず敬語でたずねてしまいそうになった。

のすけはアタシ達に深くうなずいた。

「解釈次第ではどっちも正しいとも言える」

「のすけ。それって拡大解釈してない？」

「してるぞ。だってライトノベルの元々の意味は『手軽に読んでもらえる小説』だからな」

「ああ、だからライトってついてるんだ」

「しずく。これくらい常識だよ」

姉が茶々を入れた。何そのドヤ顔は？　そういうサブカルチャーを知らない相手に知識人面して見下すような態度をするから肩身の狭い思いをするってことにどうして気づかないの。

「ちずるさん。それはまたおいおい話そう」

のすけは静止してからさらに言う。

「ライトノベルは言ったとおりジュニア向け。中高校生をターゲットにしている。といっても段々と歳をとった人たちも手に触れるようになってきた。メジャーになってきているからだな。この辺はマンガとちよつとだけ似ている。人気が出れば、興味がわいて読みたくなる」

のすけが言うには、アニメ化も宣伝効果を狙っているケースが多いのだという。ふーん。

アタシはちよつとついて行けなくて、困っていると。

「そう硬くなる必要はないって。ライトノベルは『活字のマンガ』とおもってくれればいいから」

活字のマンガ？

それは何かおかしいのではないだろうか。そうおもいながらのすけの言葉に耳を傾けていると、姉は軽く爪を噛んでいた。かんがえごとをしているみたいだった。

「だから、ラブコメとかアクションとか、マンガと同じように様々なジャンルがある。能力や武器を使った過激なモノだったり、逆に少女漫画みたいに恋の戦^{いくさ}をしていたりするわけだ」

うーむ。あまり読んでいないけど、そういうことらしい。のすけから借りたライトノベルは女の子が主人公で、コメディ路線かとおもいきや、シリアスバトルが展開されていたりした。

「もっと細かくすると、純文学とか私小説とか、そういう『固い』読み物じゃなくてマンガみたいに突飛な展開や不思議なストーリーを使った内容の小説をラノベとおもってくれればいい」

のすけは補足として「ラノベみたいな小説はあるけど、一応はレベルでわかれているから『ラノベみたいなもの』であってラノベではないから注意してくれ」と付け加えた。うーん。マンガみたいに超能力バトルとかラブコメディがあるものをライトノベルとおもえばいいのかな。と、アタシは解釈した。

「んで、次に小説には『テーマ』がある。テーマってなんだとおもう？」

姉はいきおいよく挙手した。

その顔は自信に満ち溢れていた。

「ちずるさん。答えを」

「たとえば『ヤンデレに愛されまくる主人公が逃げる!』とか」

「残念だけどそれは内容の簡略化だとおもっぞ」

姉、撃沈。

キーボードに突っ伏してしまった。ベッドの上に座ったアタシに目をむけるのすけは答えろと促していた。テーマって、こういうことかな？

「命の重さとか儚さ？」

「うん。悪くない。テーマってのは作品を通して作者が伝えたいことだな。だから、命の尊さを解いても大丈夫」

おお。どうやらアタシは模範的だけど解答を言ってみたんだ。

「テーマってのは案外好まれるけど、ぶっちゃけ説教臭いと人気上がり難いから注意だ。関係ないけど、ジブリの『平成たぬき合戦ぽんぽこ』は環境問題がテーマだったぞ」

あれは見てればある程度の想像はついた。たしかに、たぬきたちが行き場を失い人間の世界に混じって暮らすことを余儀なくされた物語だったからだ。

「それと『天空の城ラピュタ』も環境問題がテーマだ」

ええ！？

アレって少年と少女が冒険を繰り広げて絆を深めるってストーリーじゃないかったの！？

姉もどことなく驚いているようで、眉をしかめていた。

「わかり辛かったとおもうけど、一応はシートが『ひとは土から離れて生きてはいけない』って言うてただろ？ 要するに大地を敬え、自然を尊べってことだな」

わかり辛い。

面白いけどテーマがわかり辛いよラピュタ。ちなみに、アタシが一番好きなキャラはパズーだ。元気いっぱい、シートのために危険を冒す度胸が格好よかった。

「とまあ、テーマって本当に必要か？ と疑問におもうとおもう」

「かもしれない。わたしも二次元の世界に浸りたいだけなのに政治とか持つてこられても嫌だなあ」

「そうおもうひともいるとおもうんだ。テーマって後付けもありだし、そこまで深く考える必要はない」

断言しちゃったよのすけ。

さんざん引つ張つておいてそれはないんじゃないの。そうおもったけど、メッセーじ性の強すぎる作品は売れにくいと聞くし、作品を売りたいのであればメッセーじ性を削るべきなのかもしれない。

「テーマを売りにしたいなら、もちろん考えたっていいんだ。でも、単純でおもしろい悩めるテーマをお勧めしたいところだな」

「のすけの言うおススメのテーマって何？」

アタシの質問に、のすけは一度だけ腕を組み、すぐに口に出した。「絆とか誇りとか、そういうものだ。友情を深めたり、譲れないもののために闘ったりすること。カビが生えてるって言う割にはみんな好きだろ。俺も大好きだ」

少年マンガチックなテーマである。

有名な少年誌のテーマは勝利、友情、努力の三拍子だったはずだ。「テーマは後付けでいい、というひとは出来るだけカッコいい決め台詞をかんがえておくといいとおもうぞ。それはもう、説教タイムを超えてやるぜ！ って感じの意気込みで」

「おお！ マジばねえタイムを超える意気込みが必要か！」

「そうそうその意気だよ。ちずるさん」
よくわかんないけど、説教タイムとはその話には必要不可欠なものようだった。

咳払いの音がした。
のすけがしたのだ。

「テーマを決めたら、次はストーリーだ。といつても、ストーリーを決めてからテーマを決めてもいいから、どっちから先にするかはご本人に任せます」

「はい！ ちょっとしずくう、返事は？」

やっぱりアタシも入ってるのか……。

しずぶと、アタシはうなずいた。

「ストーリーを作るのは世界観を先に作るか、それともキャラクターを最初に作るかがポイントだ」

のすけは説明をしていた。

たとえば、魔術師の女子高生をかんがえたとして、そのキャラクターがいるのならば現代の世界が望ましい。けれど、その女子高生の世界が、現代とまったく同じなのかそれともそうでないのか。

「現代の世界に似ているパラレルワールドみたいな世界でもいいんだ。たとえば魔術と科学が同時発展していたり、まったく違う技術で車や飛行機が動いていたりしていったって構わない。そのキャラクターがいてもおかしくない世界なら」

勇者がいるのなら、レンガ造りの家ってイメージは強いとおもう。イメージしたキャラにあった世界観を作れということか。

「でも、異世界へ行っちゃうストーリーだったら、逆に普通の男子高校生とか女子高校生でも問題はない。特殊な能力を身につけるか、それとも特殊なアイテムを持たせるかは作者に任す。でも、『十二国記』の陽子みたいに、実は元から『異世界から地球に来て知らない

いまま育った』というバックボーンがあっても面白い」

ふうむ。のすけの表情はいつもと変わらないのに、口だけが激しく動くので大変に薄気味悪かった。口だけ別の生き物なのではないだろうかと疑いたくなるほどに活発的だった。目は死んでいるのに、口は本当に生き生きしていた。きつとのすけの本体はあの口なんだとアタシはおもった。

姉はのすけの言っていることにうなずきながらキーボードをタイプピングしていた。のすけほどじゃないけど姉も速い。

「んで、たとえばこんな世界観を作ったとする」

のすけが自分の大きめのノートパソコンでタイプピングを始めた。相変わらず速い。慣れている感じがする。

魔術と科学が同時発展した地球。

科学と魔術を合わせた技術で様々なことが可能。

見栄えはほとんどが現代社会と変わらないが、一部の魔術を使った建物のみは幾何学だったり幻想的だったりしている。

住んでいる人間は魔術師の適性があるものと、そうでない普通の人間にわかれている。

ありがちな設定であるが、好まれている設定でもあるとおもふ。

「さて、ここに暮らしている人物はどんなヤツなのか？ ある程度のプロフィールを作るぞ」

かたかた。

タイプピングの音が姉のおう部屋に響いていた。

名前 山田太郎

性別 男

年齢 16

職業 高校二年生

特徴 中肉中背。やる気のなさそうな目をしている。

能力 どんな道具でも使える能力

出生 ごく普通の一般家庭であるが、両親は仲が悪く家にいない性格 やる気はないが、ひとの命がかかったときや、傷ついているひとがいると放っておけない隠れ熱血漢。重要な局面だけ熱くなるが、それ以外では物事に頓着しない。

速いなあ。

アタシが姉の彼氏（候補）のキーボードさばきに感心している間に、キャラクターのプロファイルが出来あがっていた。

「たとえば、こんなキャラクターでもいいんだ」

「この能力は何？」

「んゝずるい設定だけど、『知的生命体がつった道具』であるならば、なんでも体の一部みたいに使える能力」

「チートだよ！」

姉の文句みたいな叫び。

「違う！ 主人公補正だ！」

のすけの妙に激しい反論だった。主人公補正？

何それ？

「主人公は強すぎても問題はない。主人公だからな。ついでに、たとえ弱くても『双六の孫』や『勝利の息子』並の幸運を持っていていいんだ。カードゲームでラストターンに切り札なんざ引けるかよ！」

どうやらのすけは、切り札を引けないで何回も敗北を味わったらしい。

のすけは苛立った自分の姿を見られたのがいたたまれなかったの

か、咳払いした。

「主人公がなぜ事件に巻き込まれたり関わったりするのか、その切欠が必要だ。たとえばたまたま会ったヒロインを助けることにした。なんて王道パターンでも問題はまったくくない」

「あ、それアタシもよく聞くパターンだね」

「世界中どこにでもあるストーリーだ。それで、そのヒロインもまた訳ありなのがいいんだよな。たとえばヒロインだけど」

名前 佐藤明子

性別 女

年齢 15

職業 高校二年生 兼 一流の魔術師

特徴 やや小柄でロングヘア。ケン力を売るように強い眼光。

能力 魔術の心得がある。

出生 魔術師同士から生まれたの純潔の魔女。両親は他界して、

親戚の家に預けられていた。

性格 魔術が使えるということを鼻にかけていて、すぐにムキになつてしまい気性がやや荒い。プライドが邪魔をしてだれかに甘えることが上手くない。

のすけはキーボードから手を放して背伸びする。

「こんなところか？ このふたりが、たまたま出会って巨悪に立ち向かうってストーリーはどうよ？」

「ちよつとのすけえ。巨悪はどんな感じなの？」

姉のもつともな質問に、のすけは「ああ」と口を開けた。どうやら巨悪の設定をかんがえ忘れていたらしい。

かたかた。

かたかたかた。

のすけは急いでキーボードを動かした。そこに書きだされる文字は、すぐに悪役を生み出していた。

名前 今井良久

性別 男

年齢 35（推定）

職業 純潔主義の幹部

特徴 やせ気味だが長身（189センチメートルほど）。蛇のように鋭い眼差し。いつも黒い背広を着ている。

能力 魔術の心得があり、特殊なアイテムを使える。

出生 データが抹消されて不明。

性格 魔術を使えない人間を人間として見ておらず、すべての魔術が使えない人間を皆殺しにしようとしている危険な男であるが、紳士的。

「こんなんできました」

悪役らしく年齢や出生はちょっと不明にしてあるということらしい。なぜこつちには服装まで書いてあるのだろうか……… ああ、あつちは学生だから大抵は制服ですごしているから必要ないのかな。そうアタシは解釈した。

「さて、ある程度の設定がまとまったところで、今度はプロットに入るぞ」

「プロット？」

アタシが聞き返すと、のすけは目を見開いた。無駄なりアクションだわ。

「物語の骨組とおもってくれ。これから書く物語の要約バージョンだな。あらすじともいう」

「え？ それって物語が出来てからやるんじゃないの？」

「設定がまとまっていなくても、話の順序がまとまってなきゃしつかりと進められないだろ？」

そうということらしい。

アタシはのすけがまたキーボードをタイピングしている後姿を黙って見ていた。姉はのすけの頭に顎を乗せて、カクンカクンと顎を動かしていた。それでも、のすけのキーボードのペースは遅くならない。むしろ速くなったような気がする。ひよっとして照れるのかもしれない。

そして、のすけはプロット（あらすじとも）を完成させた。

高校二年生の山田太郎はコンビニによってマンガの立ち読みをして家へ帰ろうとしたところで、佐藤明子という同じく高校二年生の女子生徒にぶつかってしまふ。その際に、明子が落としたのは魔術的な要素で作られたアイテムで、だれにも使えないはずのそれは太郎の『道具を使える』能力によって発動してしまふ。そのあり得ない事態を目撃した明子は太郎をつけ回して自分の助手としてスカウトする。あまりにもしつこかったので太郎は根負けして、しぶしぶながらも彼女の仕事につき合わされてしまふことになった。

彼女の仕事は魔術師のみの世界を理想とする『純潔主義』を掲げた組織との対決であり、日夜調査を続けていたという。彼女は純血主義と敵対する組織に属していた。

最初は半信半疑だった太郎であるが、明子から渡されたアイテムを使い、組織の敵と戦っている内に明子を信じて積極的に協力をすることにした。

ふたりはいくつかの仕事を終えた後に、明子の上司から仮パートナーとなるよう言われ、互いをよく知るために同居を命じられる。それから日常生活と戦いを共にしている内にふふたりの関係が深まってくる。

ふたりは上司のさらに上司から『今井良久』という人物の調査を命

じられる。

ある日、敵の組織の隠れ家を見つけたと上司に呼び出されるが、実はその上司は純血主義の幹部である今井良久本人だった。密偵として紛れこんでいたが、太郎の能力が邪魔だと独断で暗殺を目論む良久の魔術に追い込まれる太郎と明子であったが、大けがをしながらもこれを撃破。

敵の幹部を逮捕した功績を認められ、入院中の太郎は明子と正式なパートナーにされたと報告を受ける。

遠回しの告白をする太郎に、明子はそつとキスをした。

「わかり易い悪党とわかり易いカップルが戦うストーリーができました」

振り向くすけと偉そうに腕を組む姉。

「褒めて使わす」

「ははあ。ありがたき幸せにございます」

なんで教えてる側が三つ指ついてんのよ。ちょっとわかり辛いの
は否定しないけどおかしい構図だ。

「いやいや。それじゃあどっちが指南してもらってるかわからないよ」

アタシは静かにツツこんでから内容をざっと見る。うーん、どこかで見たことがあるような感じのお話である。悪くはないけど、のすけが最初に言ったとおりにかビが生えている。

「ちなみに、まだ考えていないけどキャラクターに欠点を持たせると人間味が増すぞ。なんでもできる完璧超人だと面白みに欠けるかな」

のすけ曰く。キャラクターが生き生きとしていないと、ストーリーの面白さが足らなくなるらしい。アタシがキャラクターを作るとしたら、のすけの口と同じくらいに活発なキャラクターにしようとおもった。

のすけの裏切り！？（前書き）

たまゝにラノベ講座が登場しますが、一応の本筋は『ニートの姉を真人間に戻そうとすること』と『のすけとくつつけること』です。悪しからず。（・・・）

のすけの裏切り！？

アタシの姉はニートだ。

働かざる者、食うべからずという諺を実行してしまえば飢え死に
してしまうタイプである。

それはもういいかな。

もうわかりきっていることだし、毎回そうおもっていても仕方が
ない。

アタシはちよつとかんがえた。いままでの事柄を。

さつき帰ったのすけが言っていた簡易ラノベ講座的にするなら、
こんな感じかな。

アタシは姉が覗きをやっていた事実を知った。覗かれていたのは
橘龍之介という男子高校生で、姉は毎日のように彼を見つめていた
らしい。

そしてアタシは姉のパソコンを人質にとって橘龍之介に片思いを
している（と言えば聞こえはいいがオカズにしていただけ）のであ
れば、告白しろと迫った。

アタシは必死に女子高生のネットワークを使って橘龍之介に関し
ての情報を色々と聞き回り、偶然を装って知り合いになる。帰り際
に橘龍之介はヤバそうな人達（明らかにカタギではない）と交流関
係があることを知る。

それから姉と一度でもいいから会ってくれと頼むと、彼は呆気なく
承諾してくれた。その翌日に、姉が犯罪をカミングアウト（覗き）
して、橘龍之介がネタを口にしてから数分後には打ち解けあい、橘

龍之介は姉と友達になった。

異臭漂う姉の部屋にて回想を終えた。

相変わらずティッシュや塵が散乱していて、部屋の隅には埃がたまっているし嫌なにおいがする。しかし、ゲームやマンガは整理整頓されているというアンバランスな部屋だ。

回想をもう一度だけ頭の中で反復する。

姉と橘龍之介ことのすけが友達になった。

ここまではよかった。

ここまでは本当によかった。

「いやあ、のすけってラノベ大賞狙ってたんだあ。前にテレビで一次選考すら受かったことがないって人が何人もいたのに、のすけって凄いなだね。見直しちゃった……って、しずく？　どうかした？」

アタシが内心穏やかでないことを雰囲気を感じとったのか、姉がまた、今度はすこしだけ違った喋り方で「ノオ！　ノオノオノオノオ！」と言った。本当に発音が悪ッ！

実は本日、のすけを見送ったときにこんな会話をしていた。

「のすけ、お姉ちゃんに働くように言ってくれるはずだったけど？」

「ん？　もちろんそうだよ。でも、頭ごなしに働かなかつたらクズだ。と言われて働く気になる？」

「ならない、かな？」

のすけの言い方がちよつと極端な気はするけど、実際にそんなふうに言われて働くひとはいないとおもった。

「だろう。だから、俺はちずるさんが自発的に働いてくれるように誘導しようとおもってるんだ」

「へえ。そうなんだ。話は変わるんだけどさ」

のすけは首をかしげてアタシを見た。比喻表現なしで本当に首をかしげていた。なんでこんなに横になっているのに骨が折れないんだろつか？ 首が柔らかいのかな。ここまで曲がると、隠し芸で通じるレベルだとおもった。もしかして特殊な骨格でも持っているのかもしれない。

「のすけはお姉ちゃんのことどうおもってるの？」

「普通に彼女になってほしいとはおもってるよ」

脈ありどころの騒ぎじゃなかった。

アタシは心の中のざわめきを押さえ込み、言った。

「のすけは、お姉ちゃんに告白、するの？」

「んゝどうだろうな。相手が俺のことを好きかどうかわかんないし。どうにも、な」

後頭部を高速で掻きながらアタシと視線を外したのすけ。どうやら、アタシの予想通りに脈はあるみたいだ。

しかし、のすけはここで思いがけないことを言った。

「でも、告白されたら断れないな」

その瞬間に、アタシは思い出した。

もとより姉を告白させるつもりだったんだ！

なのに、いままで姉を働くように説得してもらったことばかりをかんがえて、そもそもの目的をすっかり忘れてしまっていた！？

「じゃあ、またな」

「う、うん。またね」

手を軽く振ってから、集合場所のコンビニから立ち去った。ちらつと後ろを見ると、コンビニ近くを歩いていた黒服に声をかけていた。いやいや、超親しげだけど、アレ絶対に【893】さんだよ。なんでつきあいあるの？ 怖いよ。

という感じだった。

アタシはため息を吐いて言った。

「お姉ちゃん。アタシ言ったよね。のすけに告白してって」

「チツ、思い出したか」

どうやら思い出せなかったらそのまま何も言わないでいるつもりだったらしい姉。

今日はライトノベルの講義を一時間ほど受けてから現在にいたるのだけれど、姉は興奮冷めやらぬという感じだった。

「のすけ、告白されたら断れないって言ってたよ」

「マジで！？ い、いいや。リア充は爆死するからパス」
なんの話？

というか「りあじゅう」って何？

またアタシには理解できない単語を出されたので首をかしげそうになった——比喻表現的な意味——けど今度は怯まない。そんな言葉で誤魔化されるモノか！

「お姉ちゃん！ そんなこと言ってないで、告白しちゃいなよ」

「むむむむむむむむ」

「無理？」

コクコク、と何度もうなずいてきた。

はあ、「告白なんて無理だよ！」と言いたかったのだろうけど、「む」を連呼しながら止まってしまつてしまうとは、なんて情けない姉だろうか。我が姉ながら度胸がない。なさすぎる。

「それに、どうせ三次元は裏切るんだ！ わたしは信じないぞひとの心なんて！」

「アニメみたいな台詞を言わないでよ！」

アタシは姉の言葉を聞きながら頭をおさえた。ふう、なんでこう、イチイチ言い訳がましいんだろうか。そんなに自分の思い通りにならない三次元が嫌いなのかな？ でも、二次元なら思い通りに、な

っているのかな？

「お姉ちゃん。ゲームで悲惨な目にあったことはある？」

「え？ そりゃ、あるよ」

「そのときに裏切られたっておもったことはあるの？」

目を逸らされた。

姉は何食わぬ顔でネットゲームをはじめてしまった。アタシはそのスキにノートパソコンをひったくり、持ち上げる。

「手がすべっちゃうかもしれないよ？」

「やめ！ やめええええ！？ どうしてこんなことするの！？」

「お姉ちゃんがだらしなからでしょう！」

ちよつと自分で言つて恥ずかしくなるようなことではあるけれど、言わずにはいられなかった。だって、ねえ、半泣きになって膝にへばりつかれるとおもわなかったから……というか、段々と姉のダメっぷりに拍車がかかっているような気がしてならないんだけど……これは気のせいなのかな？

「お慈悲を！ どうかお慈悲を！」

ダメだ。気のせいじゃないっぽい。

じゃなかったら、鼻水をすすりながらアタシのお膝元で土下座するはずがない。なんだか母親から我が子を取りあげたらこんな気分になるかもしれないとおもってしまうほどだった。いや、マジで怖い。このパソコンがなくなったら姉は自殺しかねないとおもってしまっただけに。

「告白する？」

「……………」

そっぽ向いて口笛吹き始める姉。

ウソ泣きだったし。

ウソ泣きだからってアレはやりすぎだって、恥ずかしくないだろうか。

「お姉ちゃん。アタシはとっても真剣なんだけど？」

「へっ」

パツとパソコンを手放し、落下寸前でキャッチ。姉の顔が引きつった。これはいいリアクションだ。

「やめてえ！ 壊れたら修理に時間かかるし、わたしの命といっても過言じゃあないんだよオ！」

「うーん。どーしよっかな？」

わざとらしく笑みを浮かべたアタシを悪魔みたいに見る姉のすがたは、ちよっとおかしかった。

なんとか姉を説得（脅迫とも）した結果、自分から告白すると決めてくれた。

アタシは『やり遂げた乙女の顔』をしながら異臭の立ち込める部屋から出る。そして、はたと気づいた。

姉がいつ告白するのかわからない日取りを決めていなかったのだ。

『ノオオオオオオオオオオオオオオオウ！！』

姉の絶叫が家中に響いた。

アタシはドアを開き、絶句。

「なんでまた望遠鏡だしてんのよ！？」

しかも場所がまたのすけの家にセットされてたし。

「え？ そ、そそ、そそそおそそみみみみ」

「それより見て？」

コクコクとうなずかれた。

てっきりのすけのすがたを遠くから見つめて自分を慰めているのかとおもいきや、姉はずいぶんとキョドっているのだ。なぜそうなってしまったのか知るために、アタシは望遠鏡を覗きこみ……………はい？

椅子に座ったのすけの背後から、女の子が抱きついてるのだ。のすけも嫌がった素振りは見せず、じゃれつくように話し合っ

いるではないか。

え？ 女の子？

はいはいはい！？

もしかして——ふたまたですか！？

のすけ！ 姉というモノがありながらなんと非道な！

姉はカーテンをにぎりしめ、カーテンを噛みしめていた。

「悔しいザマス！」

スネオの真似をするくらいには余裕があるらしい。

恋のライバル（になるのかな？）が登場し、アタシは頭を悩ませ

た。姉は未だにカーテンを齧り、涙目になっている。

神よ神よ、神さまよ

両親が帰ってきた。

母親は嫌味な目線と小言を言うのが大得意で、ファンデーションのノリが悪いときは八つ当たりしてくることがある。

父親は典型的なメタボリックシンドロームで髪の毛が寂しくなってきた。さいきは洗面所においてある育毛剤の種類が増えたような気がする。

そんな両親に挨拶をしたのすけは、今日も姉の部屋にいた。しかし、アタシと姉の内心に気づいていないのか呑気にお茶を飲んでいく。アタシたちが出たのではない。ここに来る前に買ってきていたのだ。数は三つ、アタシと姉の分も買ってきていた。

お心遣い痛み入るよのすけ。けれど、ふたまた疑惑をハッキリするまではアタシが何かを言うつもりはない。

「なんか今日、ふたりとも機嫌が悪そうだけど、親とケンカしたとか？」

「別に」

「べつつにー」

アタシ、姉の順でのすけになんでもないと告げる。のすけはなんの疑いもなくそれを信じこんだ。

「なんでカーテンの一部が千切れてるんだ？」

「べつつにー」

「べつつにー」

姉と同じくやる気のない返答。

あのカーテンはのすけのふたまた——とまだ決まっていなかったが、きつとふたまただ——がわかったときに、姉がスネオの真似をしてカーテンを噛んで引っぱたためにできた傷だ。なんとも無残な状況

になっている。姉がカーテンを翳ったの理由の半分はのすけのせいとも言えた。もちろん伝える気はないけれど。

「いや。駄目だよしく。」

こう着状態じゃちがあかない。ここは正面突破で聞くのが一番だ。姉と見合わせる。姉妹的アイコンタクトでうなずきあう。けれど、いつ聞けばいいのかちよっと思いつかない。

「そうか。じゃあ、今日は進め方についてかな？ よくこれで躓くひとがいるんだ。俺も未だに躓くけどな。展開がおもいつかなくてまた、ためになるのかわかんないライトノベル講座をはじめる。」

「物語を進める上でもっとも簡単な手法、っていうか一番多い手法は、キャラクターを絡ませることだ」

「それは当たり前じゃないの？」

姉のつまらなそうな言葉に、のすけはうなずいた。

「そう。当たり前のことだ。たとえば『涼宮ハルヒの憂鬱』はハルヒがいなかったら物語の世界がなりたたない。ハルヒがいるから物語が進むだろ？ でも、物語を進行させているのは小泉だったり朝倉さんだったりする。キヨンはそれに巻き込まれ、嫌々ながら、面倒くさがりながらも解決する。キヨンを巻きこむのはハルヒだけ、だれかに道を提示されたときに物語がすすむ」

「朝比奈さんが入ってないのはなんで？」

姉の不機嫌そうな言葉にのすけは後頭部を掻く。

「実は超展開にならないだろ？」

「そう？」

「超展開になるときは基本的に小泉がうすく笑ったり朝比奈さんが微笑んだりしたときだけだろ？ 違ったならごめん」

アタシはさっぱりついていけない。しかし、書店に行くときも大々的に宣伝されているから面白いのだろう。てつきりあのハルヒなる女子高生が主人公とおもいきや、キヨンという独自の感性を持った冴えない男子高校生が主人公らしい。

「といってもこれを丸パクリしたらデッドコピー量産は決まったよ

うなものだ。新人賞でも『劣化キョンはもう要らない!』とされている。つまり、もっと刺激が欲しいわけだ。たとえば、主人公が成長するみたいに」

のすけは一度、チラリと姉のほうを見た。なんで？

アタシがそうおもっていると、のすけは咳払いした。

「たとえば主人公が無職の少女、少年だったとして、この時点で『それ本当に少年少女?』とつつこみを入れたくなるかもしれないが、たとえば何かに立ち向かう動機が『家が離散の危機』や『家族や親友の手術費用』がほしい。他にも『個人的に小遣いがほしかった』なんて理由にしてもいいとおもう。主人公が『自分かだれかのために行動する』動機づけがほしいわけだ」

ふううん。

つまり、主人公はできるだけ『わけあり』にしとけということだろうか。アタシはそう解釈した。

「そして特別なことなんてなかったけど『少しずつ大人に成長した』主人公を描いても面白いとおもう。この場合は珍妙なギャグを入れても効果的だが、もっと効果的なのは『主人公と共感できる』出来事や行動などかな?」

「つまりいい。わたしと同じように自宅警備員だったら自宅警備員にわかりやすいように、伝わり易いようにしろってこと?」

姉が頬杖をついた状態で言う。それでものすけは顔色ひとつ変えずにうなずいた。

「そうそう。たとえば、どれくらい仕事が嫌いか。なぜ働きたくないかなどを作品の随所に盛り込んでおく。そうすることで『たしかに』や『私と同じこと言ってる!』なんておもわせればもう、言うことなしだ。それができないからプロが苦戦しているわけだけだな」

「ふーん」

「へーん」

アタシ、姉と返事をする、と、流石にのすけは顔色を変えた。怒っているのかとおもいきや、困ったように顔をしかめただけに終わる。

ひよつとしてのすけの沸点が異常に高いという噂は本当なのかもしれない。

「聞く気あるのかなあ？ ひよつとして今日は『やる気ないのに予定がある』って感じにナイーヴ？」

「まあ、そんな感じかなあ」

耳を掻きながら姉が答える。その目は裏切り者を見る目をしていた。けれどすけは気づかない。それはそうだ。またしてもカーテンをあけていて、姉にのぞかれていたということを知らないんだから。

のすけは困ったように笑ってから、妙案をおもいついたとばかりに手を打った。何をするつもりだろうか？

彼はいつもの無表情的な顔になると遠慮なく言った。

「ちずるさん。俺と一緒にデートしない？」

「ぶぎい！？」

姉がブタみたいに鳴くと後ずさる。まるでエビが後退するみたいに壁に当たって後頭部を痛める。眼鏡が半分ずり落ちていた。なんとみつともないすがたか。そんな姉はアタシとのすけを何度も交互に見ている。まるで助けを請うような表情だったけど、アタシはどうすればいいのかわからない。

アタシが何かを言う前に、のすけはアタシを見た。

「嫌ならしくも一緒に近所のファミレスでお茶するとか」

「うゆい！？」

「びぎい！？」

アタシのだっさい声と姉の汚い声が重なった。

それでもすけは平然と言う。まるで声が聞こえていませんと言うふうだ。

「これはラノベを書くときに使えるんだから、修行だともったほうがいい」

「しゅ、修行？ いったいなんの」

姉はすり落ちた眼鏡を元の位置に戻しながら問うた。

のすけは指を立てて答える。間違えて中指を立てていたことに気づき、やや慌てて人差し指を立てた。なんて間違いをするんだ。

「キャラクターとは創作物の登場人物のことを意味するのではなくて『人格』を意味する。そこに人間味がなかったり個性的じゃなかったりすると『クソキャラ』と罵られやすくなってしまう。そうならないように、自分の感情や思い出をできるだけ多く知っておく必要があるんだ。たとえば、本を読んでキャラクターに感情移入するのもひとつの修行で――」

「じゃあそれにする！ わたしは外に出ない！ はい決定！」

姉の迅速に返事をする。きつと金メダリストも舌を巻くほどだったに違いないとアタシはおもった。さて、のすけの出方は如何に……立てた人差し指を左右に振っている。いわゆる「甘い甘い」というジェスチャーだ。

「そうだな。それもひとつの手だ。別に引きこもりで受賞している人だっているけど、全体に比べれば大分少ない。たぶん『俺もその内の一人になつてやる！』とおもってやっている人はいいるが、ぶっちゃけた話『経験』に勝る気持ちはない。書物上の『疑似体験』じゃなくて、そのとき本当に感動したり不快におもったりして本当の『体験』になつて『思い出』として記憶されるからだ」

姉が何か言おうと口をひらきかけたけど、のすけはその口を手で遮った。彼にしては珍しく物理的なアプローチを仕掛けたみたいだ。「もちろん。それが確実に自分を昇華させてくれるとは限らない。だけど、少なくとも『刺激』にはなる。もしもそのときに受けた感覚を文章化できたら、それは掛け値なしの武器になるぞ」

のすけが手を放すと、姉は何も言えずにうなだれる。理詰めをするつもりが理詰めをされたから悩んでいるみたいだった。けれどそ

こは姉だった。絶対に行くモノか！ そう断言してしまう。

なぜのすけがイキナリこんなことを言いだしたのかわかった。

アタシが仕事をするように言ったことが起因しているみたいだ。

けれど、のすけは先ずは外に出すことからはじめようとしているみたいだ。ステップとしては正しい。アタシはちよつと急ぎすぎているのかもしれないと反省していると、姉は腕を組んで窓を見た。

「外を見ればいいじゃん」

「うん。だけど、人があんまりいない。それと描写できる場所も視界のとどく範囲に限定される」

「ね、ネットすればいいじゃん！」

「うん。情報社会だけど、得たばかりのにわか知識ばかり使っていても面白くならないかもしれないぞ？ それに、得た知識を最大限に使うには外の空気をすって、刺激を受けてリラックスしたほうが脳味噌に優しいはずだ」

ぐぬぬぬ。

姉は唸った。

これはもう少しなのではないか？ のすけがふたまたをしていたとしても、姉を家の外から出したとしたら、その功績は大きい。そんなことをおもっていると、インターフォンが鳴った。すると、母親が下から呼びだす声。

姉は引きこもり。部屋から出る気がない。

のすけはお客さん。我が家の客人にあう必要がない。

必然的にアタシが行くことになり、渋々ながらも母親の元へ行く。階段を降りると、面倒くさそうな目をむけられる。お母さん。毎回おもっただけど、その目は心がささくれるからやめてほしい。

「新しいお友達でもできたの？」

「……わかんない」

とりあえず会ってみることにした。

ドアをあけて、そこにいた人物にアタシは目をひんむくことになった。おいおい、これはなんの冗談なのよ！？

神さまがもしも本当にいるとしたら、ずいぶんと遊び好きみたいだ。

「はじめまして。あなたが、しずく、さん。ですか？」
にっこりと。

天使のような笑みを浮かべた少女にアタシは勤めて明るい笑みを返した。きっとこの笑みは口元が釣っているに違いない。

「ど、どこかでお会いしましたか？」

「いいえ。初対面です」

またしてもエンジェルスマイル。

どうすればいいのかわからないでいると、少女はお辞儀した。

「もう一度。はじめまして——朱美といいます」

昨夜に見た。

のすけがふたまたをかけているのではないかと疑った（現在検証中）相手が、そこにいた。

アタシは混乱して、いつそう引きつった笑みをするほかになかった。

神よ。神よ。神さまよ。

アタシはどんなリアクションをすればいいわけ？

あたりまえだけど、返答はなかった。

神よ神よ、神さまよ

両親が帰ってきた。

母親は嫌味な目線と小言を言うのが大得意で、ファンデーションのノリが悪いときは八つ当たりしてくることがある。

父親は典型的なメタボリックシンドロームで髪の毛が寂しくなってきた。さいきは洗面所においてある育毛剤の種類が増えたような気がする。

そんな両親に挨拶をしたのすけは、今日も姉の部屋にいた。しかし、アタシと姉の内心に気づいていないのか呑気にお茶を飲んでいく。アタシたちが出たのではない。ここに来る前に買ってきていたのだ。数は三つ、アタシと姉の分も買ってきていた。

お心遣い痛み入るよのすけ。けれど、ふたまた疑惑をハッキリするまではアタシが何かを言うつもりはない。

「なんか今日、ふたりとも機嫌が悪そうだけど、親とケンカしたとか？」

「別に」

「べつつにー」

アタシ、姉の順でのすけになんでもないと告げる。のすけはなんの疑いもなくそれを信じこんだ。

「なんでカーテンの一部が千切れてるんだ？」

「べつつにー」

「べつつにー」

姉と同じくやる気のない返答。

あのカーテンはのすけのふたまた——とまだ決まっていなかったが、きつとふたまただ——がわかったときに、姉がスネオの真似をしてカーテンを噛んで引っぱたためにできた傷だ。なんとも無残な状況

になっている。姉がカーテンを翳ったの理由の半分はのすけのせいとも言えた。もちろん伝える気はないけれど。

「いや。駄目だよしく。」

こう着状態じゃちがあかない。ここは正面突破で聞くのが一番だ。姉と見合わせる。姉妹的アイコンタクトでうなずきあう。けれど、いつ聞けばいいのかちよっと思いつかない。

「そうか。じゃあ、今日は進め方についてかな？ よくこれで躓くひとがいるんだ。俺も未だに躓くけどな。展開がおもいつかなくてまた、ためになるのかわかんないライトノベル講座をはじめる。」

「物語を進める上でもっとも簡単な手法、っていうか一番多い手法は、キャラクターを絡ませることだ」

「それは当たり前じゃないの？」

姉のつまらなそうな言葉に、のすけはうなずいた。

「そう。当たり前前のことだ。たとえば『涼宮ハルヒの憂鬱』はハルヒがいなかったら物語の世界がなりたたない。ハルヒがいるから物語が進むだろ？ でも、物語を進行させているのは小泉だったり朝倉さんだったりする。キヨンはそれに巻き込まれ、嫌々ながら、面倒くさがりながらも解決する。キヨンを巻きこむのはハルヒだけ、だれかに道を提示されたときに物語がすすむ」

「朝比奈さんが入ってないのはなんで？」

姉の不機嫌そうな言葉にのすけは後頭部を搔く。

「実は超展開にならないだろ？」

「そう？」

「超展開になるときは基本的に小泉がうすく笑ったり朝比奈さんが微笑んだりしたときだけだろ？ 違ったならごめん」

アタシはさっぱりついていけない。しかし、書店に行くとともに大々的に宣伝されているから面白いのだろう。てつきりあのハルヒなる女子高生が主人公とおもいきや、キヨンという独自の感性を持った冴えない男子高校生が主人公らしい。

「といってもこれを丸パクリしたらデッドコピー量産は決まったよ

うなものだ。新人賞でも『劣化キョンはもう要らない!』と言われている。つまり、もっと刺激が欲しいわけだ。たとえば、主人公が成長するみたいに」

のすけは一度、チラリと姉のほうを見た。なんで？

アタシがそうおもっていると、のすけは咳払いした。

「たとえば主人公が無職の少女、少年だったとして、この時点で『それ本当に少年少女?』とつつこみを入れたくなるかもしれないが、たとえば何かに立ち向かう動機が『家が離散の危機』や『家族や親友の手術費用』がほしい。他にも『個人的に小遣いがほしかった』なんて理由にしてもいいとおもう。主人公が『自分かだれかのために行動する』動機づけがほしいわけだ」

ふううん。

つまり、主人公はできるだけ『わけあり』にしとけということだろうか。アタシはそう解釈した。

「そして特別なことなんてなかったけど『少しずつ大人に成長した』主人公を描いても面白いとおもう。この場合は珍妙なギャグを入れても効果的だが、もっと効果的なのは『主人公と共感できる』出来事や行動などかな?」

「つまりいい。わたしと同じように自宅警備員だったら自宅警備員にわかりやすいように、伝わり易いようにしろってこと?」

姉が頬杖をついた状態で言う。それでものすけは顔色ひとつ変えずにうなずいた。

「そうそう。たとえば、どれくらい仕事が嫌いか。なぜ働きたくないかなどを作品の随所に盛り込んでおく。そうすることで『たしかに』や『私と同じこと言ってる!』なんておもわせればもう、言うことなした。それができないからプロが苦戦しているわけだけだな」

「ふーん」

「へーん」

アタシ、姉と返事をする、と、流石にのすけは顔色を変えた。怒っているのかとおもいきや、困ったように顔をしかめただけに終わる。

ひよつとしてのすけの沸点が異常に高いという噂は本当なのかもしれない。

「聞く気あるのかなあ？ ひよつとして今日は『やる気ないのに予定がある』って感じにナイーヴ？」

「まあ、そんな感じかなあ」

耳を掻きながら姉が答える。その目は裏切り者を見る目をしていた。けれどすけは気づかない。それはそうだ。またしてもカーテンをあけていて、姉にのぞかれていたということを知らないんだから。

のすけは困ったように笑ってから、妙案をおもいついたとばかりに手を打った。何をするつもりだろうか？

彼はいつもの無表情的な顔になると遠慮なく言った。

「ちずるさん。俺と一緒にデートしない？」

「ぶぎい！？」

姉がブタみたいに鳴くと後ずさる。まるでエビが後退するみたいに壁に当たって後頭部を痛める。眼鏡が半分ずり落ちていた。なんとみつともないすがたか。そんな姉はアタシとのすけを何度も交互に見ている。まるで助けを請うような表情だったけど、アタシはどうすればいいのかわからない。

アタシが何かを言う前に、のすけはアタシを見た。

「嫌ならしくも一緒に近所のファミレスでお茶するとか」

「うゆい！？」

「びぎい！？」

アタシのだっさい声と姉の汚い声が重なった。

それでもすけは平然と言う。まるで声が聞こえていませんと言うふうだ。

「これはラノベを書くときに使えるんだから、修行だともったほうがいい」

「しゅ、修行？ いったいなんの」

姉はずり落ちた眼鏡を元の位置に戻しながら問うた。

のすけは指を立てて答える。間違えて中指を立てていたことに気づき、やや慌てて人差し指を立てた。なんて間違いをするんだ。

「キャラクターとは創作物の登場人物のことを意味するのではなくて『人格』を意味する。そこに人間味がなかったり個性的じゃなかったりすると『クソキャラ』と罵られやすくなってしまう。そうならないように、自分の感情や思い出をできるだけ多く知っておく必要があるんだ。たとえば、本を読んでキャラクターに感情移入するのもひとつの修行で――」

「じゃあそれにする！ わたしは外に出ない！ はい決定！」

姉の迅速に返事をする。きつと金メダリストも舌を巻くほどだったに違いないとアタシはおもった。さて、のすけの出方は如何に……立てた人差し指を左右に振っている。いわゆる「甘い甘い」というジェスチャーだ。

「そうだな。それもひとつの手だ。別に引きこもりで受賞している人だっているけど、全体に比べれば大分少ない。たぶん『俺もその内の一人になつてやる！』とおもってやっている人はいるが、ぶっちゃけた話『経験』に勝る気持ちはない。書物上の『疑似体験』じゃなくて、そのとき本当に感動したり不快におもったりして本当の『体験』になつて『思い出』として記憶されるからだ」

姉が何か言おうと口をひらきかけたけど、のすけはその口を手で遮った。彼にしては珍しく物理的なアプローチを仕掛けたみたいだ。「もちろん。それが確実に自分を昇華させてくれるとは限らない。だけど、少なくとも『刺激』にはなる。もしもそのときに受けた感覚を文章化できたら、それは掛け値なしの武器になるぞ」

のすけが手を放すと、姉は何も言えずにうなだれる。理詰めをするつもりが理詰めをされたから悩んでいるみたいだった。けれどそ

こは姉だった。絶対に行くモノか！　そう断言してしまう。

なぜのすけがイキナリこんなことを言いだしたのかわかった。

アタシが仕事をするように言ったことが起因しているみたいだ。

けれど、のすけは先ずは外に出すことからはじめようとしているみたいだ。ステップとしては正しい。アタシはちよつと急ぎすぎているのかもしれないと反省していると、姉は腕を組んで窓を見た。

「外を見ればいいじゃん」

「うん。だけど、人があんまりいない。それと描写できる場所も視界のとどく範囲に限定される」

「ね、ネットすればいいじゃん！」

「うん。情報社会だけど、得たばかりのにわか知識ばかり使っていても面白くならないかもしれないぞ？　それに、得た知識を最大限に使うには外の空気をすって、刺激を受けてリラックスしたほうが脳味噌に優しいはずだ」

ぐぬぬぬ。

姉は唸った。

これはもう少しなのではないか？　のすけがふたまたをしていたとしても、姉を家の外から出したとしたら、その功績は大きい。そんなことをおもっていると、インターフォンが鳴った。すると、母親が下から呼びだす声。

姉は引きこもり。部屋から出る気がない。

のすけはお客さん。我が家の客人にあう必要がない。

必然的にアタシが行くことになり、渋々ながらも母親の元へ行く。階段を降りると、面倒くさそうな目をむけられる。お母さん。毎回おもっただけど、その目は心がささくれるからやめてほしい。

「新しいお友達でもできたの？」

「……わかんない」

とりあえず会ってみることにした。

ドアをあけて、そこにいた人物にアタシは目をひんむくことになった。おいおい、これはなんの冗談なのよ！？

神さまがもしも本当にいるとしたら、ずいぶんと遊び好きみたいだ。

「はじめまして。あなたが、しずく、さん。ですか？」
にっこりと。

天使のような笑みを浮かべた少女にアタシは勤めて明るい笑みを返した。きっとこの笑みは口元が釣っているに違いない。

「ど、どこかでお会いしましたか？」

「いいえ。初対面です」

またしてもエンジェルスマイル。

どうすればいいのかわからないでいると、少女はお辞儀した。

「もう一度。はじめまして——あけみ朱美といいます」

昨夜に見た。

のすけがふたまたをかけているのではないかと疑った（現在検証中）相手が、そこにいた。

アタシは混乱して、いつそう引きつった笑みをするほかになかった。

神よ。神よ。神さまよ。

アタシはどんなリアクションをすればいいわけ？

あたりまえだけど、返答はなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5365x/>

ニートの姉などもう要らんッ！

2011年11月13日03時26分発行